
2023年度第3回研究大会 発表予稿集

日時：2023年8月27日（日）

《第1部》10:00-12:00

《第2部》13:00-17:40

場所：(対面) 関東学院大学金沢八景キャンパス

7号館201号室

(オンライン) Zoom

主催：日本韓国研究会（JAK）

お問い合わせ：大会事務局 jak.jimu@gmail.com

目次

■ プログラム

- ・ ポスター
- ・ スケジュール

■ 研究発表

- ・ 渡邊 香織（千葉大学大学院）
「サハリン韓人の発話の特徴」
- ・ 飯田 華子（関西大学）
「初級レベルの文法教材における日韓の禁止表現の現状調査」
- ・ 崔 銀景（鎮西学院大学）
「語学以外の韓国語科目における実践報告」
- ・ 尹 孝貞（法政大学大学院）
「文学を通じた日韓の文化交流—金素雲、尹東柱の比較から見えてくるもの」
- ・ 尹 鈺喜（群馬県立女子大学）
「韓国在住脱北者におけるアイデンティティ・ポリティクスと多文化主義」
- ・ 車 必立（西江大学校大学院）
「상상된 조국들 : 한국방문 4세대 在日の 정체성 변화과정을 중심으로」

プログラム

ポスター

日本韓国研究会

Japan Association of Koreanology

2023年8月27日(日)

第3回研究大会

場
所

関東学院大学
金沢八景キャンパス
7号館 201号室
(Zoomとのハイブリッド開催)
昼食は各自でご用意ください

第1部 10:00～12:00

ワークショップ「震災と人間」

関東大震災から100年の年に、「震災と人間」というキーワードをもとに、韓国・朝鮮研究の各分野(文学、社会学、歴史学)の登壇者にお話しをお聞きします。登壇者と参加者との質疑応答をとおして交流を行い、今後各自の研究や教育に活かすことができるような機会をつくりたいと考えています。

第2部 13:00～17:40

研究発表

懇親会(対面) 18:00～

発表資料ダウンロード用URL、
Zoom情報は、
前日までにメールでお送りします。
(会場はwifi完備)

申込方法

オンライン登録を
お願いいたします
参加申込みフォーム

<https://forms.gle/sdYq3TKyWQMHC5ebA>

締切:2023年8月25日(金)

お問合せ

jak.jimu@gmail.com
日本韓国研究会(JAK)



ワークショップ「震災と人間」

司会:金景彩(慶應義塾大学)

10:05-10:35 影本剛(立命館大学)

「虐殺の余震
-植民地検閲下の朝鮮文学に現われた関東大震災」

10:35-11:05 加藤恵美(帝京大学)

「被災した朝鮮学校の研究:東北朝鮮学校との「出会い」」

11:05-11:35 魯洙彬(東京大学大学院)

「関東大震災後の在日朝鮮人対策と児童保護
-相愛学院の不良少年保護を中心に」

11:35-12:00 トークセッション・質疑応答

研究発表

司会:仲島淳子(関西大学大学院博士後期課程)

<第1発表>

13:00-13:40 渡邊香織(千葉大学大学院)
「サハリン韓人の発話の特徴」

<第2発表>

13:45-14:25 飯田 華子(関西大学)
「初級レベルの文法教材における日韓の禁止表現の現状調査」

司会:趙智英(同志社大学)

<第3発表>

14:35-15:15 崔銀景(鎮西学院大学)
「語学以外の韓国語科目における実践報告」

<第4発表>

15:20-16:00 尹孝貞(法政大学大学院)
「文学を通じた日韓の文化交流
-金素雲、尹東柱の比較から見えてくるもの」

司会:山口祐香(日本学術振興会)

<第5発表>

16:10-16:50 尹珍喜(群馬県立女子大学)
「韓国在住脱北者における
アイデンティティ・ポリティクスと多文化主義」

<第6発表>

16:55-17:35 車必立(西江大学校大学院)
「상상된 조국들
:한국방문 4세대 在日의 정체성변화과정을 중심으로」

スケジュール

第1部 ワークショップ【震災と人間】

時間	司会：金 景彩（慶應義塾大学）
10:00-12:00	1. 影本 剛（立命館大学） 「虐殺の余震-植民地検閲下の朝鮮文学に現われた関東大震災」 2. 加藤 恵美（帝京大学） 「被災した朝鮮学校の研究：東北朝鮮学校との「出会い」」 3. 魯 洙彬（東京大学大学院） 「関東大震災後の在日朝鮮人対策と児童保護—相愛学院の不良少年保護を中心に」 トークセッション・質疑応答
12:00-13:00	昼食休憩

第2部 研究発表

時間	発表者	発表タイトル	司会	頁
13:00-13:40	渡邊 香織 (千葉大学大学院)	サハリン韓人の発話の特徴	仲島 淳子 (関西大学大学院 博士後期課程)	7
13:45-14:25	飯田 華子 (関西大学)	初級レベルの文法教材における 日韓の禁止表現の現状調査		11
14:35-15:15	崔 銀景 (鎮西学院大学)	語学以外の韓国語科目における実践報告	趙 智英 (同志社大学)	22
15:20-16:00	尹 孝貞 (法政大学大学院)	文学を通じた日韓の文化交流—金素雲、 尹東柱の比較から見えてくるもの		27
16:10-16:50	尹 鈺喜 (群馬県立女子大学)	韓国在住脱北者におけるアイデンティティ・ ポリティクスと多文化主義	山口 祐香 (日本学術振興会)	43
16:55-17:35	車 必立 (西江大学大学院)	상상된 조국들 : 한국방문 4세대 在日の 정체성 변화과정을 중심으로		50
18:00-	懇親会			

研究発表

サハリン韓人の発話の特徴

渡邊 香織（千葉大学大学院）

<要旨>

本発表は、サハリン韓人の発話の特徴について、ウリマル放送のインタビュー映像から分析したものである。サハリン韓人の話す韓国語には慶尚道方言の特徴と北朝鮮の語彙、日本語、ロシア語の語彙が混在していた。サハリン韓人1世はその多くが慶尚道出身であることから、2世以降の韓国語話者も慶尚道方言の影響を受けているものと思われる。また、サハリンでは1945年以降に北朝鮮の支援を受け民族教育を行っていた時期があることから、北朝鮮の言語の影響も受けている。日本語の語彙の出現は多くはなかったが、1945年以前の樺太時代の主要言語は日本語であったことから、日本語の影響が見られるのは当然の結果だと思われる。また、現代文化に関する語彙はロシア語の使用が見られた。これは該当語彙と韓国語で接したことがないためだと思われる。今後はより多くのサハリン韓人を対象に調査を行うと同時に、書き言葉の分析も進めていきたい。

キーワード サハリン韓人、在樺コリアン、サハリン残留朝鮮人、樺太

1. はじめに

本発表は、サハリン韓人の発話の特徴について、サハリンで放送されている「ウリマル放送（У р и м а л Б а н с о н）」という番組のインタビュー映像から分析したものである。

サハリン韓人とは、日本統治下の朝鮮半島からサハリン（当時は樺太）に移住した人々とそのことである。現在サハリンの人口約40万人のうち、約2万5千人がサハリン韓人である。

サハリン韓人1世の母語は出身地の慶尚道方言をベースとした韓国語だが、2世は個人差があり、韓国語が母語の者、韓国語は聞き取れるが話せない者、ロシア語しか解さない者がいる。3世以降の母語はほぼロシア語である。

ウリマル放送は、ウリマル放送局という韓人のメディアが放送している番組名である。ウリマル放送は週に1度30分、サハリン韓人向けにロシアの国

営チャンネルを通じて放送される。内容はサハリンの主要ニュースとサハリン韓人社会のニュースやイベント、サハリンで活躍する韓人の紹介などで、番組内では韓国語とロシア語が用いられる。

2. 先行研究

サハリン韓人の言語に関する先行研究は、在日コリアンは中国朝鮮族のものに比べ非常に少ない。代表的なものは Ramsey (1992)、金 (2008)、真田・金 (2014)、Fajst&Matsumoto(2020)、吉田・松本 (2022) などである。

Ramsey (1992) はサハリンの4都市でインタビューを行い、サハリン韓人の言語の特徴を分析したものである。この中ではサハリン韓人の使う韓国語には慶尚道方言、咸鏡道方言の特徴が現れ、その他に日本語とロシア語の影響も見られると報告されている。

金 (2008) と真田・金 (2014) は韓人にインタビュー調査を行い、発話を分析したものである。これらは日本語発話時に現れる朝鮮語 (韓国語) の干渉について分析したもので、ロシア語の干渉については分析が行われていない。

Fajst&Matsumoto(2020) はインターネットで大規模なアンケートを行い、サハリンで話されるロシア語に含まれる日本と韓国語の借用語について調査したものである。これは200人を超える今までにない大規模な調査である点で非常に貴重な報告だが、インターネット上のアンケートという特性上、回答内容の事実性や回答者の偏りなど、問題点もある。

吉田・松本 (2022) はサハリン韓人と在日コリアンの発話から音節核のヴァリエーションを対照したものである。これは音声だけの分析ではあるが、ロシア語を母語とする若い韓人も調査対象に含まれている点で、サハリン韓人の言語について新たな知見を与えてくれたと言える。

3. 分析結果の概要

本発表では、ウリマル放送に登場し、韓国語で発話した者だけを対象にその発話を分析した。その結果、先行研究でも指摘されているように、韓国語が母語と見られる者の発話は慶尚道方言をベースに、北朝鮮で使われる語彙、日本語とロシア語の語彙が混在していた。北朝鮮の語彙が含まれるのは、1945年以降、民族語教育のために北朝鮮から教材などの支援を受け、中央アジアの高麗人 (朝鮮時代末期に朝鮮半島北部からロシア沿海州に渡り、その後中央アジアに強制移住させられた集団) が教師役として派遣されていたことが関係す

ると思われる。

また、樺太時代（1945 年以前）の話をする時は、韓国語で話していても日本語にコードスイッチングが行われる場合があった。日本語の語彙と日本語と韓国語を混ぜた語彙もいくつか現れた。しかし、樺太時代の話をしている場合であっても、地名は現在のロシア語地名が使われており、日本語地名が使われることはほぼなかった。

ロシア語へのコードスイッチングやロシア語語彙の使用も見られた。ロシア語の語彙は、ソ連特有の文化などを表す語や、現代生活に関する語が多かった。これらの新しい語彙は韓国語で何と言うか知らないため、ロシア語を使っているものと思われる。

4. 終わりに

今回の発表は、インタビュー映像を資料とした特性上、発話者の詳しい属性が分からないという問題点がある。また、分析に使用できた発話の合計時間も短いため、今後はより多くのサハリン韓人を対象に、より長時間の発話を分析する必要がある。また、紙媒体の韓人メディアを資料とした書き言葉の分析も進めていきたい。

<参考文献>

- 金美貞（2008）「日本語と朝鮮語の接触について：サハリン朝鮮人 2 世の事例」『日本語学研究』第 23 号、pp. 15-29.
- 真田信治・金美貞（2014）「サハリン日本語における朝鮮語の干渉：残留コリアン F さんの談話から」『北海道方言研究会叢書』第 6 号、pp. 144-151.
- （2020）「韓流の変化」『日本と韓国の架け橋』日本次郎（編），朝日出版，pp. 11-98.
- 吉田さち・松本和子（2022）「在外コリアンの音節核のヴァリエーション：在日・在サハリンの対象社会言語学的考察」『跡見学園女子大学文学部紀要』第 57 号，pp. 209-232.
- Fajst&Matsumoto（2020）Japanese and Korean Loanwords in a Far East Russian Variety: Human Mobility and Language Contact in Sakhalin. *Asian and African languages and linguistics*. No.14, pp.155-195.
- S. Robert Ramsey（1993）‘A Preliminary Report on Sakhalin Korean.’ 『サ

ハリンの少数民族』 pp. 49

初級レベルの文法教材における

日韓の禁止表現の現状調査

飯田 華子 (関西大学)

<要旨>

本発表では、日本における日本語教育と韓国語教育で使用される初級レベルの文法教材にみられる、日韓の禁止表現の項目に関する調査の結果について報告する。初級レベルの文法教材として、韓国語は日本の大学で使用されている教材、日本語は日本の大学の留学生別科で使用されている教材を中心に調査した。禁止表現の項目としては、禁止表現を「相手にある行為をしないようにする言語行為」と定義し、日本語では6個の表現と3個の語彙、韓国語では10個の表現と3個の語彙を調査対象とし、これらが各言語の初級レベルの文法教材でどのように扱われているのかを調査した。これらの調査から、日韓の言語間での差異を中心に整理した。また、現状調査を踏まえ、日韓の禁止表現の教育の必要性と今後の課題についても言及する。

キーワード 禁止表現、禁止語、行為要求表現、韓国語教育、日本語教育、

1. はじめに

禁止表現は、韓国語では補助用言「말다」、日本語では終助詞「～な」を代表として、その周辺のいくつかの表現に限定された研究がほとんどであった。以下の例文は、韓国語と日本語における代表的な禁止表現が使われた文である。

- 1) a. 여기에서 담배를 피우지 마세요.
- b. ここでたばこを吸うな。

しかし、実際の発話で使用される禁止表現は、上のような表現のみにとどまらず、非常に多岐にわたる。韓国語の禁止表現の多様性について 김영란(1998)は、19個もの具体的な表現を禁止表現として提示し、その表現

の多様性を明らかにした。日本語について李（2017）は、日本語の禁止の最も基本的な表現は「するな」であるが、現代日常会話ではこの形式を使うケースは少ないこと、『現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）』での使用は「もう来るな」、「二度と来るな」、「どこへも行くな」など定型的な使用しなかったことを明らかにしている。

一方、禁止表現はこれまで、否定法の一部や、命令法の一部として扱われることが多く、一つの文法範疇として確立していなかった。これは教育においても同様である。これに対し이은희(2012)は、相手の行為をやめるように妨げる禁止表現は、聴者のフェイスを侵害する可能性もあるため、話者の立場では、非常に注意が必要な言語行為となると、禁止表現の使用の難しさを指摘している。日本語においても李（2017）は、禁止には命令文とは違う特性が備わっているため、禁止表現を単独の意味カテゴリーとしてみていく必要があると考えると、禁止表現の研究の必要性を述べた。また李（2017）は、禁止表現の記述的分析により、どのような表現をどのような文脈で使うのが適切か分かれば、自然な会話ができるよう指導することにも役立ち、日本語学習者にとっても有益であろうと、禁止表現の教育の必要性についても言及している。

このような禁止表現の教育について、禁止表現のより良い教授法、学習法を提案するためには、まず禁止表現が現在どのように教育されているのか、その実態を正確に把握することが必要であると考え。そこで本研究は、日本語母語話者のための韓国語の禁止表現の教授法の提案のための第一歩として、日韓の初級レベルの教材を対象に、禁止表現の扱われ方を調査し、両言語における禁止表現の教育の実態を探ることを目的とする。また、コミュニケーション能力向上のための禁止表現の教育の必要性と今後の課題についても言及したい。そのために、日本における日本語教育と韓国語教育で使用される初級レベルの文法教材にみられる、日韓の禁止表現の項目に関する調査の結果について報告する。

2. 先行研究

日韓両言語において、これまで否定表現や行為指示に比べて、禁止表現に着目した研究があまり活発に行われてこなかった。その中でも、教育学考察を行った先行研究はほとんど見られないが、本研究の趣旨と似た研究として이은희(2012)がある。

이은희(2012)は、韓国語の禁止表現の細かい機能と禁止の言語ストラテジー及びストラテジー別の具体的な表現形態を明らかにし、韓国語話者の禁止表現の使用の様相をもとに、韓国語の禁止表現の効率的な教授学習内

容を提示することを目的とした研究である。この中で、韓国の 4 つの大学（慶熙大学校、高麗大学校、延世大学校、梨花女子大学校）で使用されている教材を対象に、禁止表現の扱い方について分析している。分析内容は、(1)各教材の長所と短所を提示し、(2)提示類型の比較し、(3)機能別の提示状況について分析している。これらの結果、すべての教材において「-지 말다」の命令形、「-(으)면 안 되다」の平叙形が目標項目（一部において理解項目）として提示されている反面、その他の表現に関しては、教材によってかなりの差が見られる結果であった。この二つの表現に関しては、教材別に、提示順序と時期にかんしても比較している。この結果について、教材を含めた禁止表現の項目の実際の使用が反映されていない教材もあること、細かい機能に対する考慮が不足していることを指摘している。

3. 調査対象

3.1 禁止表現について

本研究では、先行研究¹と辞書的意味²を参考に、禁止表現を「相手にある行為をしないようにする言語行為」と定義する。

このような禁止表現として、韓国語では、김영란(1998)、이은희(2012)を参考に、6個の表現（-지 말다、-지 말라、-지 말아 주다、-지 못하다、-면 안 되다、-ㄴ 필요 없다、-ㄴ 수 없다、-지 않도록/게 하다、-지 않는 게 좋다）と3個の語彙（금지、그만하다、불가(능)하다）を対象とする。日本語では、仁田（1991）、李（2017）、そして韓国語の禁止表現の類型を参考に、10個の表現（～な、～ないでください、～てはいけない、～たらだめだ、～なくていい、～ことはできない、～ないほうがいい）と3個の語彙（禁止、やめる、不可能だ）を調査対象とする。

3.2 教材について

3.2.1. 初級レベルとは

文字と発音の学習が終わり、初めて文法の学習に入った段階からを「初級」

¹ 禁止表現について김영란(1998)は「한국어 금지 표현이란 한국어에서 금지 행을 실현시키는 표현을 의미한다.」、이은희(2012)は「금지 표현은 상대방에게 어떠한 행위를 못하도록 하는 일종의 행위 지시 표현이다.」のように定義している。

² 『표준국어대사전』では、「금지」について「법이나 규칙이나 명령 따위로 어떤 행위를 하지 못하도록 함.」、「금지어」について「어떤 목적을 위해 규칙이나 기준을 정하여 사용하지 못하도록 한 말.」と説明している。

と位置づける。そのような学習者を対象とした教材を初級レベルの教材とし、本考察の対象とする。また今回は、文法教材のみを扱うこととし、会話や聞き取りなど、その他に重点を置いた教材は扱わないこととする。教材の選定基準については、本研究の今後の課題として、日本の大学における韓国語のコミュニケーション教育への発展を視野に入れていることから、日本の大学で使用されている教材を対象とする。

3.2.2. 韓国語

現在日本で出版されている韓国語の教材は多数あり、それぞれの大学のカリキュラムに合った教材を独自に開発するなど、学校ごとに使用している教材が多様である。今回はその中でも、関西圏にある韓国朝鮮語を主専攻、もしくは副専攻として選択できる大学において、初級レベルの授業で使用している文法教材を、各大学の外部公開用シラバスを基に調査した。その結果の中で、二校以上の学校で使用されている教材は、『基礎から学ぶ韓国語講座初級 改訂版』、『キャンパス韓国語』、『ことばの架け橋』、『実用韓国語 改訂版』の四つであった。そしてこれらを今回の考察対象として設定する。

3.2.3. 日本語

日本語は関西圏の大学の中で、留学生別科が併設されている大学を対象に、留学生を対象とした日本語の初級の授業で使用されている教材を、各大学の外部公開用シラバスを基に調査した。その結果、『まるごと』、『げんき』、『みんなの日本語』の三つの教材が主に使用されていた。大学ごとに多様な教材が使用されている韓国語に比べ、日本語は主に使用されている教材の種類が限られており、これら以外の教材の使用は今回見られなかった。よって本研究ではこの三つを考察対象として設定する。

4. 調査結果

4.1 形態別の提示段階

4.1.1. 韓国語

韓国語の教材において、禁止表現のそれぞれの形態が、どの学習段階において提示されているのかを整理した。

表1 韓国語の禁止表現の形態と提示された学習段階³

類型	教材 A	教材 B	教材 C	教材 D
-지 말다(命令)	×	9	7.8	6.1
-지 말다(勧誘)	×	×	×	×
-지 말아 주다(命令)	×	×	×	×
-지 못하다(平叙)	(7)	(8)	(6.7)	(7.2)
-면 안 되다(平叙)	9	×	10	9.4
-르 필요 없다(平叙)	×	×	×	×
-르 수 없다(平叙)	(10)	(8)	(9.4)	(7.2)
-지 않도록/게 하다(命令)	×	×	×	×
-지 않도록/게 하다(勧誘)	×	×	×	×
-지 않는 게 좋다(平叙)	×	×	×	×
금지	×	×	×	×
그만하다	×	×	×	×
불가(능)하다	×	×	×	×

上の表の括弧で提示している項目は、目標項目としての提示はあったものの、禁止としての使用が見られなかったものである。

4.1.2. 日本語

日本語の教材において、禁止表現のそれぞれの形態が、どの学習段階において提示されているのかを整理した。

表2 日本語の禁止表現の形態と提示された学習段階

類型	教材 A	教材 B	教材 C
～な	×	×	×
～ないください	6.8	6	3.5
～てはいけない	6	7.3	2.6
～たらだめだ	×	×	×
～なくていい	×	×	(7.4)
～ことはできない	(7.2)	×	×
～ないほうがいい	×	7.5	5.2
禁止	×	×	×
やめる	×	×	4.8
不可能だ	×	×	×

³ 上の表の数値は、教材の全ての課を10として、各教材で目標項目として提示された課を計算したものを示している。

ここでも表3と同様、目標項目としての提示はあったものの、禁止としての使用が見られなかった項目については、括弧でその段階を示している。

4.2 教材別の各形態の提示環境

4.2.1. 韓国語

教材 A

「-지 말다」の命令形

項目なし

「-면 안 되다」の平叙形

対話の場面：学校（友人同士の対話）

レポートの修正をお願いする

対話での提示：なし

練習問題に出てきた内容：자전거를 타다, 맵다, 선생님께 드리다, 거리에서 축구를 하다, 방에 들어가다

教材 B

「-지 말다」の命令形

対話の場面：博物館（友人同士の対話）

博物館の見学について話す

対話での提示：「(박물관에) 들어가지 마세요.」

練習問題に出てきた内容：들어가다, 일본에 가다, 저를 잊다, 수업 시간에 자다, 기다리다, 울다, 걱정하다, 말하다, 잊다, 담배를 피우다, 수영하다, 만지다, 나가다, 타다, 먹다, 사진을 찍다

「-면 안 되다」の平叙形

項目なし

教材 C

「-지 말다」の命令形

対話の場面：CDショップ（友人同士の対話）

よく聞く音楽について話す

対話での提示：「걱정하지 마세요.」

練習問題に出てきた内容：걱정하다, 무리하다, 떠들다, 노래를 부르다, 쓰레기를 버리다, 내일로 미루다, 너무 서두르다, 창문을 닫다, 담배를 피우다

「-면 안 되다」の平叙形

対話の場面：学生食堂（友人同士の対話）

帰国準備について話す

対話での提示：「日本에 가서 연락하는 거 잊어버리면 안 돼요.」
練習問題に出てきた内容：거짓말을 하다, 어두운 곳에서 책을 읽다, 사진을 찍다, 떠들다, 술 마시고 운전하다, 먼저 먹다, 지우다, 휴대폰을 사용하다

教材 D

「-지 말다」の命令形

対話の場面：学校（先生と生徒の対話）

体調について話す

対話での提示：「너무 무리하지 마세요.」

練習問題に出てきた内容：무리하다, 사진을 보다, 사진을 찍다, 담배를 피우다, 주차하다, 휴대폰을 사용하다, 들어가다, 떠들다, 밖에 나가다, 목욕하다, 아이스크림을 드시다, 말을 하다

「-면 안 되다」の平叙形

対話の場面：正月の友人宅（友人同士の対話）

韓国の食事作法について話す

対話での提示：「한국 음식은 (그릇을) 들고 먹으면 안 돼요.」

練習問題に出てきた内容：술 마시고 운전하다, 사진을 찍다, (수업 중에)이야기하다, 커피를 마시다, 전화를 하다, 졸다, 떠들다, 음악을 듣다, 어른보다 먼저 먹다, 늦게 들어가다, 술을 마시다(고등학생)
※一部「-지 마세요」と同じであることを説明

4.2.2. 日本語

教材 A

「～てはいけない」

対話の場面：映画館（友人同士の対話）

お互いの家族について話す

対話での提示：なし

練習問題に出てきた内容：遊ぶ、タバコを吸う、写真を撮る、車を止める、入る、食べる、話す、野球をする

「～ないでください」

対話の場面：病院（医者と患者の対話）

風邪の症状と注意事項について話す

対話での提示：「今晚はお風呂に入らないでくださいね。」

練習問題に出てきた内容：写真を撮る、車を止める、心配する、お風呂に入る、入る、自転車を置く、野球をする、なくす、書く、押す、お酒を飲む、窓を開ける、使う

教材 B

「～てはいけない」

対話の場面：食堂（国籍の異なる友人同士の対話）

食事の作法について話す

対話での提示：「乾杯する前に飲んじゃいけませんよ。」

練習問題に出てきた内容：食べる（アレルギー）、飲む（乾杯する前、運転して帰る時）、塩をかける（血圧が高い人）、音を立ててスープを飲む、茶碗を持つ、全部食べる、左手を使って食べる

「～ないでください」

対話の場面：会社（健康アドバイザーと社員の対話）

健康のアドバイスをする

対話での提示：「あ、急に回さないでください。」

練習問題に出てきた内容：首を急に回す、無理をする、体操をする、働きすぎる、PC を長い時間見る、暗い部屋で文字を見る、お酒を飲みすぎる、エレベーターを使う

「～ないほうがいい」

対話の場面：？（友人同士の対話）

沖縄旅行について話す

対話での提示：「9月はできれば行かないほうがいいですよ。」

練習問題に出てきた内容：お土産を旅行のはじめに買う、小さい子どもを連れていく、長時間外を歩く、お酒を飲みすぎる、買う（レンタルを勧める）

教材 C

「～てはいけない」

対話の場面：学校（先生と生徒の対話）

授業でのルールについて注意する

対話での提示：「クラスで寝てはいけませんよ。」

練習問題に出てきた内容：クラスで寝る、写真を撮る、テレビを見る、たばこを吸う、図書館で電話をかける、食べる、犬を連れてくる、お酒を飲む（18歳）、図書館で話す

「～ないでください」

対話の場面：バーベキュー（友人同士の対話）

約束について、準備について話す

対話での提示：「あ、まだ飲まないでください。」

練習問題に出てきた内容：写真を撮る、写真を見る、窓を開ける、た

ばこを吸う、電気を消す、テレビをつける、パソコンを使う、電話する

「～ないほうがいい」

対話の場面：病院（医者と患者の対話）

風邪の症状と注意事項について話す

対話での提示：「二三日、運動しないほうがいいでしょう。」

練習問題に出てきた内容：運動する、授業を休む、甘いものを食べる、お酒を飲む、たばこを吸う

5. 今後の課題

外国語教育において、コミュニケーション能力として、Canal(1983)は文法能力(grammatical competence)、社会言語学的能力(sociolinguistic competence)、談話能力(discourse competence)、方略能力(strategic competence)の四つを提示した。その中でも、場面に即した適切な言語使用を可能にする知識または能力が社会言語学的能力である。社会言語学的能力とは、対人コミュニケーション的側面が強いが、八島(2004)はこの能力について、母語では自然に習得できる反面、第二言語では社会言語学的ルールを使いこなすのは難しく、誤解の原因となる逸脱を生み出す可能性がある」と説明した。

禁止表現ははじめにも述べたように、円滑なコミュニケーションの観点から使用に注意が必要な表現である。よって、学習者が実際のコミュニケーションにおいて禁止表現を正しく使用し、円滑なコミュニケーションを築き、誤解を生まないようにするために、禁止表現の教授法を提案していくことが必要であると考える。そのために、禁止表現の実際の使用に関する研究を進めていくことが必要である。現在他の否定表現や依頼表現に比べて、禁止表現に関する研究が進んでいないのが現況である。それを基にして、日本語母語の韓国語学習者を対象とした禁止表現の教授法を提案していくことを今後の課題とする。

<参考文献>

英保すずな・内藤裕子・渡嘉敷恭子(2014)「国内外の日本語教育機関における初級日本語教材の実態調査・ニーズ調査と分析結果」関西外国語大学留学生別科日本語教育論集 24, pp. 37-48.

伊藤俊一(2021)「依頼と禁止の表現について—日本語コミュニケーション教育

- を視野に入れた基礎研究—」愛知教育大学研究報告教育科学編 70, pp.128-134.
- 金順任 (2011) 「日本語と韓国語の言語景観における禁止表現」『明海日本語』第 16 号, pp.53-62.
- 小林幸江・鈴木美加 (2015) 「国内外の高等教育機関における日本語教育事情調査」日本学研究 5, pp.95-108.
- 清ルミ (2006) 「禁止の場面における現実の言語表現 医師と美術館員の場合」『世界の日本語教育』16, pp.107-123.
- 高梨信乃 (2011) 「行為要求について—日本語教育における問題—」『神戸大学留学生センター紀要』17, pp.1-17.
- 辻岡咲子 (2018) 「日韓における行為要求表現の運用に関する対照研究」『国文学』102, pp.460-446.
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
- 八島智子 (2004) 『外国語コミュニケーションの情意と動機 研究と教育の視点』関西大学出版部
- 八島智子・久保田真弓 (2012) 『異文化コミュニケーション論—グローバル・マインドとローカル・アフェクト』松柏社
- 李楠 (2017) 「日本語禁止表現の性質と類義関係についての研究」東北大学博士学位論文
- 강석우 (2014) 「의뢰 행동의 한일대조연구」『日本語學研究』42, pp.3-19.
- 김영란 (1998) 「한국어 금지 표현의 형식과 기능」상명대학교대학원 석사논문
- 김영란 (1999) 「한국어 금지 표현의 교수 방법」Journal of Korean Language Education, pp.10-2.
- 남기심・고영근 (2019) 『표준 국어문법론』탑출판사
- 이은희 (2012) 「한국어 금지 표현 교육 연구」고려대학교 대학원 박사논문
- 장경희 (2005) 「국어 지시 화행의 유형과 방법 및 지시 강도」『텍스트언어학』19 권 0 호, 한국텍스트언어학회, pp.185-208.
- 한길 (2018) 『우리말의 부정 표현을 가려잡는 낱말 연구』역락

< 辞典 >

- 국립국어원 (1999) 『표준국어대사전』, 두산동아

< 考察対象教材 >

- 木内明 (2013) 『基礎から学ぶ韓国語講座初級 改訂版』国書刊行会
- 曹美庚・李希姪 (2019) 『キャンパス韓国語』白帝社
- 生越直樹・曹喜澈 (2011) 『ことばの架け橋』白帝社
- 油谷幸利・高榮珍 (2014) 『実用韓国語 改訂版』白水社

国際交流基金（2014）『まるごと 日本のことばと文化 初級1 A2』三修社
国際交流基金（2014）『まるごと 日本のことばと文化 初級2 A2』三修社
坂野永理・池田庸子・大野裕・品川恭子・渡嘉敷恭子（2020）『げんき』ジャパ
ンタイムズ出版
スリーエーネットワーク（2012）『みんなの日本語』

언어 이외의 한국어 관련 수업 실천보고

-문화감지도구(ICS)를 활용한 문화 수업 사례를 중심으로-

崔 銀景 (鎮西学院大学)

<要旨>

本報告は韓国語非専攻者対象のA大学における文化授業と、韓国語専攻者対象のB大学における文化授業について記述している。特に、両授業で導入されたICS(Intercultural Sensitizer)について考察する。本稿では学習者の韓国語専攻有無に関係なく、学生自身が韓国文化に対してどれほど興味を持っているかによって、有用性に違いがみられている。これらを踏まえ、ICSを韓国留学前の研修や終了後の理解度測定の一方法として活用すること、さらには日本語母語話者のための韓国文化に対するICSを開発することについて提言する。

キーワード 한국 문화 수업, 언어 이외의 한국어 관련 수업, 문화감지도구(ICS, Intercultural Sensitizer)

1. 들어가며

일본 내 고등 교육 기관에서 실시되고 있는 한국어 수업은 언어 능력 향상을 목표로 하는 수업과 언어 능력과 관계없이 한국에 관한 지식 습득을 목표로 하는 수업으로 나눌 수 있다. 전자는 듣기, 말하기, 읽기, 쓰기의 4기능 또는 초급, 중급, 상급 등 학습자 레벨을 기준으로 개설되는 경우가 많다. 후자는 문화, 지역, 역사, 사회, 경제 등의 내용을 바탕으로 하며 한국어 운용 능력의 향상보다는 관련 지식을 쌓는 것에 중점을 두고 있다.¹ 과목 자체는 한국어가 아니지만 커리큘럼 상의 과목 구분 등이 한국어 관련 또는 전공 관련 등에 해당하기도 한다.

본고의 제목에서 언급한 ‘언어 이외의 한국어 관련 수업’은 후자에 해당한다. 그중 문화 분야에 초점을 맞추어 A 대학교와 B 대학교의 문화 관련 수업을

¹ 한국, 일본, 중국 등을 모두 다루는 동아시아 관련 수업이 개설된 경우도 있으나 이는 한국어 관련 수업이라 볼 수 없으므로 본고에서는 다루지 않는다.

비교하고자 한다. A 대학교와 B 대학교의 문화 수업의 공통점은 학생들의 이문화 이해를 위해 문화감지도구 (Intercultural Sensitizer, ICS)를 활용했다는 점이다. 문화감지도구는 문화 간 훈련을 위해 만들어진 것으로 실생활에서 갈등이 생길 수 있는 상황을 학습자에게 간결하게 제시하여 해결 방법을 모색하도록 한다. 해결 방법의 예시로 보기가 주어지며 학습자는 자신이 선택한 방법에 대해 교사로부터 피드백을 받을 수 있다. (손은경, 2003; 임경순, 2015; 정윤희, 2022)

본고에서는 일본어를 모어로 하는 한국어 학습자를 대상으로 한 수업에서 문화감지도구를 활용한 사례를 보고하고 이를 더 유용하게 사용할 수 있는 방법에 대해 논의하고자 한다.

2. 선행연구

제 1 장에서 기술한 문화감지도구는 기업체, 평화 봉사단 등을 위해 제작되어 파견 근무지에서 잘 적응할 수 있도록 돕는 역할을 하였다. (손은경, 2003:15) 이규림(2022)은 아랍에미리트로 파견되는 한국인 간호사를 대상으로 문화감지도구를 개발하여 초기 문화적응을 돕고자 하였다. 이 연구에서는 개발을 위해 주로 문헌을 대상으로 조사하여 한국과 문화 차이가 크게 나타난 복장, 식문화, 주거, 언어와 관련한 문화감지도구 모형을 제시하였다.

전술한 손은경(2003)은 한국어를 배우고 있는 일본어 모어화자를 대상으로 언어적 요소와 비언어적 요소로 나누어 문화감지도구 항목을 개발하여 말하기, 읽기, 쓰기, 문법, 프로젝트 수업에 어떻게 적용할 수 있는지 수업 교안을 통해 제안한 바 있다. 마찬가지로 학습자를 대상으로 한 최근 연구 중 김희정(2020)은 영미권 학습자를 대상으로 기존 문화 학습 모형을 재구성하여 식문화에 초점을 맞춘 수업 교안을 구체적으로 고찰하였다. 정윤희(2022)는 한국어와 베트남어 통번역 학습자의 한국문화 이해도를 측정하는 방안으로 문화감지도구를 활용하고자 하였다. 제 1 장에서 언급한 대로 문화감지도구는 갈등 상황에서 학습자 자신이 선택한 답안에 대해 교사로부터 피드백을 받을 수 있다. 정윤희(2022)는 교사의 피드백을 바탕으로 통번역 학습자가 잠재력을 발휘하여 자기 주도적으로 문화를 학습하도록 촉진한 것이라 볼 수 있다.

3. 문화 수업에서의 문화감지도구 활용

3.1 해당 수업 개요

본고에서 다룰 A 대학교와 B 대학교의 문화 수업에 관해 세부 사항을 다음

표 1 과 같이 정리하였다.

표 1 문화 수업 개요

	A 대학교	B 대학교
대상 학년	2 학년 이상	3 학년 이상
학습자 수	25 명	15 명
학습자 학년	2 학년 : 25 명	3 학년 : 11 명 4 학년 이상 : 4 명
한국어 전공 여부	비전공	전공
이수 요건	1 학년 대상 한국어 수업 이수자	한국어 능력시험(TOPIK) 3 급 이상(또는 그에 준함)
수업 기간	1 년 (30 회)	1 학기 (15 회)
평가 방법	수업 태도 : 40% 봄학기 그룹 발표 : 30% 가을학기 개인 발표 : 30%	수업 태도 등 : 30% 개인 발표 : 40% 필기 시험 : 30%

A 대학교 문화 수업의 이수 요건인 1 학년 대상 한국어 수업은 필수 과목이지만 2 학년부터는 선택 과목으로 변경된다. 단, 본인이 1 학년 때 이수한 언어에 해당하는 수업만 선택할 수 있다. 해당 수업은 시험 없이 수업 태도와 발표 등으로 평가하며 한국어 능력 향상을 위한 수업이 아니므로 일본어로 수업이 진행된다. 이에 따라 해당 수업은 1 학년 한국어 수업을 이수하였지만 한국어에는 자신이 없지만 학점 취득이 필요한 일부 학생들과 한국에 관심이 있는 일부 학생들이 공존하는 형태가 되었다.

B 대학교 문화 수업은 이수 요건으로 TOPIK 3 급 이상이 명시되어 있고 한국어를 전공자를 대상으로 한 수업이므로 대부분 적극적으로 수업에 임하였으나 A 대학교와 동일하게 학점 취득을 위해 수강하는 학생들도 일부 있었다. 아울러 B 대학교의 경우, 문화 수업 자체가 A 대학교에 비해 짧게 개설된 것은 아니다. 커리큘럼 상 수업이 1 학기와 2 학기로 나누어져 있는 것이며 해당 수업은 2 학기에 실시된 것임을 밝힌다.

3.2 문화감지도구 활용 방법과 고찰

A 대학교와 B 대학교 모두 수업 전반부에 한국 문화를 이해하기 위한 수단으로 문화감지도구를 활용하였다. 학생들에게 제시하는 갈등 상황은 실제 일본어 모어화자가 유학, 여행 등으로 한국에 갔을 때 일어나는 일, 한국어 모어화자가 유학, 여행 등으로 일본에 왔을 때 일어나는 일에 대해 인터뷰와 문헌 조사 실시 결과를 바탕으로 구성하였다. 학생들에게는 사진 및 글로 이루어진 상황 설명과 4 개의 보기를 제시하고 자신이라면 어떻게 할지

생각하도록 하였다. 그 후 학생들은 자신이 선택한 보기별로 나누어 왜 이 보기를 선택하였는지, 왜 다른 보기를 선택하지 않았는지 등에 대해 토론하도록 하였다. 토론이 끝나면 각 그룹이 갈등 상황과 선택지를 롤플레이로 보여주고 내용을 정리하여 해설하게 한 후 교사가 각 선택지에 대해 피드백을 하였다.

진술한 바와 같이 A 대학교는 한국어 비전공자 대상, B 대학교는 한국어 전공자 대상의 문화 수업이었으나 한국어 전공 여부보다는 학생 스스로가 한국 문화에 얼마나 관심을 가지고 있는지에 따라 문화감지도구의 활용도가 달라짐을 알 수 있었다. 한국에 관심이 있는 학생들, 유학 또는 여행을 계획하고 있는 학생들은 한국 드라마, 영화, K-Pop 등을 통해 한국 문화를 접하거나 온라인 등을 통해 한국어 모어화자와의 교류를 꾀하고 있었다. 이와 같은 경우 문화감지도구에서 제시한 상황이 학생 본인이 이미 경험하였거나 앞으로 경험하게 될 내용이기 때문에 학생이 매우 적극적으로 임하는 것을 확인할 수 있었다.

반면 한국에 관심이 없고 학점 취득을 위해 수강하는 학생의 경우에도 문화감지도구가 이문화, 다문화 이해에 도움이 되는 유용한 수단임에는 변함이 없었으나 학생 본인의 내적 동기가 그다지 높지 않아 자기주도적으로 문화를 학습하도록 촉진하는 것에는 어려움이 있었다. 이에 따라 문화감지도구가 가진 ‘모의 갈등 상황을 통해 직접 어려운 일을 경험하지 않아도 해결 방안을 알 수 있다’는 특징이 빛을 발하지 못한 것으로 여겨진다.

그러나 문화 수업에서의 문화감지도구의 효용성이 떨어진다고는 볼 수 없다. 문화감지도구는 학생들에게 한국문화를 강의식으로 전달하지 않고 경험하도록 하게 하여 능동적으로 수업에 참가하도록 유도할 수 있었다. 또한 수업에서 사용한 문화감지도구 항목을 한국문화에 관한 배경지식으로 삼을 수 있다는 장점도 있었다.

앞서 살펴본 선행연구는 한국에서 실시되는 한국어 교육 현장, 해외 파견 근무자를 위한 것으로 대상자에게 문화감지도구가 필요한 상황임을 알 수 있다. 그러나 본고에서 다룬 A 대학교와 B 대학교의 문화 수업은 문화감지도구가 필요한 학생과 그렇지 않은 학생이 공존하기 때문에 그 유용성과 활용 방안에 대해 다시금 고찰해 볼 필요가 있다고 하겠다. 예를 들어 한국 유학, 어학 연수 등을 앞둔 학생들을 대상으로 한 집중 강의²에서 문화감지도구를 사용하는 것은 선행연구에서 다룬 상황과 유사하다고 볼 수 있으며 학습자에게도 많은 도움이 될 것이다. 그뿐만 아니라 정윤희(2022)에서 제안한 바와 같이 유학, 연수를 끝낸 학생들을 대상으로 한국문화 이해도를 살펴보는 척도로 활용하는 방법도 생각할 수 있다. 현재까지 많은 연구들이 한국과 일본의 문화에 대해 논의하고 있으나 이를 적용한 문화감지척도 개발은 미미하다고 볼 수 있다. 변화하는

² 일본의 「集中講義」를 가리키며 한국의 계절학과와 유사하다.

실정에 맞추어 일본어 모어화자의 한국문화 이해를 위한 문화감지척도 개발이 가능하다면 향후 수업에서 더 높은 활용도를 보일 수 있을 것으로 기대된다.

4. 나가며

지금까지 문화감지도구를 활용한 문화 수업에서 학생 개개인의 상황에 따라 문화감지도구가 유용한 사례와 그렇지 않은 사례도 함께 알아보며 선행연구와의 차이를 논하였다. 더 나아가 문화감지척도를 한국 입국을 앞둔 학생들을 위한 수업에서 활용하는 방안, 귀국한 학생들의 한국문화 이해도를 측정하는 방안으로 활용할 것을 제안해 보았다.

한 가지 분명하게 밝히고 싶은 것은 학생의 내적 학습 동기가 적다고 해서 문화감지척도의 유용성이 떨어지는 것이 아니라는 점이다. 수업 당시에는 한국에 관심이 없더라도 문화감지척도를 활용한 수업을 통해 학생이 한국에 관심을 가지게 되는 경우, 문화감지척도 항목을 배경지식으로 하여 문화 수업을 진행하는 경우도 고려할 수 있기 때문이다.

한국과 일본의 문화 비교 선행연구는 많이 있으나 이를 문화감지척도에 적용한 논문은 많지 않은 상황이다. 문헌 조사를 바탕으로 한 문화감지척도 개발이 실시된다면 양국의 문화 이해에 한 걸음 더 내딛을 수 있을 것이다. 앞으로도 한국과 일본의 더 깊은 문화 교류를 바라며 본고를 마친다.

<참고문헌>

- 김희정 (2020) 「한국문화교육을 위한 문화감지도구 개발과 활용 방안」 부산외국어대학교 석사학위 논문.
- 손은경 (2003) 「문화감지도구(Intercultural Sensitizer) 개발 연구: 일본인 한국어 학습자를 대상으로」 연세대학교 석사학위 논문.
- 이규립 (2022) 「아랍에미리트 파견 한국인 간호사의 초기 문화적응을 위한 문화감지도구 개발」 『인문사회 21』 13(5), 아시아문화학술원, pp. 2881-2896.
- 임경순 (2015) 『외국어로서의 한국어교육을 위한 한국문화 교육론』 도서출판 역락.
- 정윤희 (2022) 「한·베 통번역 학습자를 위한 한국문화 이해도 평가 방안 연구 - 문화감지도구 활용을 중심으로-」 부산외국어대학교 박사 학위 논문.

文学を通じた日韓の文化交流研究

——金素雲、尹東柱の比較から見えてくるもの——

尹 孝貞（法政大学大学院）

<要旨>

激動の日韓関係の中で、文学は時代状況を描く作品が多く、出版以降、作家と作品に対する評価も変化が見られてきた。さらに、作品を通じた文化交流も作家自身の作品活動から読者の受容過程に至るまで、様々な形で行われた。その中で、金素雲は、主に翻訳家として日本に朝鮮文学を知らせ、植民地時代下にある朝鮮の子供たちを教育するために努力するなど、日韓の文化交流の基盤を作ったとも評価できる人物である。そして、尹東柱は 1945 年に亡くなって以来、韓国から出版された詩集が、日本でも 1980 年代に正式に出版され、彼を記念する活動が 30 年近く続けられるほど、作品をめぐる交流が様々な様相で活発に行われている。

本研究は、金素雲、尹東柱の作品が日韓でどのように受容されてきたのかを比較分析することで、彼らの作品が果たした役割を理解する試みである。一人の作家の活動が、時代の流れとどう呼応しているかに重点を置いて論じる。

キーワード 日本、朝鮮、文化交流、文学、韓国

1. はじめに

従来の KPOP ブームが続く中で、最近、『82 年生まれキム・ジヨン』（チョ・ナムジュ著、斎藤真理子訳・2018）をはじめとした朝鮮文学ブームが注目を集めている。このように朝鮮文学への関心が徐々に高まっていたが、決して日本において朝鮮文学が長い間、愛されてきたわけではない。むしろ、朝鮮研究分野においてほとんど研究されなかったともいえるほどであった。戦後、日本において金達寿、金史良、金石範などが中心として、在日朝鮮人文学が存在感を發揮してきた。しかしながら、一般読者も含む大きなブームになったのは、かなり最近になってからである。

その中で、金素雲、尹東柱は日韓ともに読まれ、両国ともに高く評価された人物である。二人は、活動した場所、時代はそれぞれ異なるが、それぞれ独特な形で日韓文化交流に影響を与えていた。2人の作品と活動は、作品を読む読者たちにも影響を与え、作品をめぐる新たな活動として広がっていたことに注目したい。

まず、金素雲は、朝鮮文化を日本人に知らせ、自ら詩も書いたが、翻訳家として知られている。彼は、1907年韓国の釜山で生まれ、1920年には日本へ渡り、夜間の学校で学んだ。1927年には、朝鮮農民歌謡を連載して日本の文壇に認められ、北原白秋のような日本の知識人の支持を受けた。1945年に帰国し、1950年代からは日本生活をもとにして、様々な随筆を書くなど、活動を続けている。様々な彼の活動の中でも最も注目すべきことは、日本に朝鮮文学を翻訳・紹介したことである。『朝鮮詩集』（1954）『朝鮮童謡選』（1933）『朝鮮民謡選』（1933）が岩波文庫で出版されるなど、朝鮮の詩を日本語で翻訳した作業が最も注目されていた。1981年亡くなるまで、故郷を思う気持ちで、祖国の詩心を日本に伝える仕事をしてきた彼だが、日本における高い評価に比べると韓国では、戦時中に書いた彼の作品を取り上げられ、「親日文人」としてみる傾向もあった。

そして、尹東柱は、日本の植民地支配下に朝鮮語で詩を書いた詩人で、1917年12月30日に北間島（現在中国延辺）の明東村で生まれ、1938年に京城（現在ソウル）の延禧専門学校文科に入学して生活した人物である。彼は、1942年4月に日本にわたり、東京の立教大学から、10月には京都・同志社大学英语英文学科に転入学し、日本でも生活していた。その後、1943年に京都下賀茂警察署に逮捕され、1944年に2年の懲役刑を宣言され、福岡刑務所に投獄される中で、1945年に同所で獄死したのである。このように、様々な場所で生活した彼はそれぞれの地域で心を込めた作品を書き、彼が実際に暮らしてきた韓国、中国、日本の読者だけでなく、全世界8ヶ国語で翻訳され、世界中の人々から読まれている。

2. 先行研究 - 日韓の文化交流

2.1 日韓の文化交流史

日韓は、隣国として経済・政治的な交流のみならず、文化・芸術的な交流も活発に行われてきた。特に、二人が活動してきた植民地時代は、従来の日韓交流においても、大きな変化が見られた激動の時代である。金素雲、尹東柱の作品を通じた文化交流を理解するためには、どのような時代背景で活動してきたのかを分析する必要がある。本章では、植民地時代から今に至るまで、日

韓の文化交流史の全体的な様相を述べる。

2.1.1 先行研究

文化交流に関する研究は、限られた期間による研究や個別の事例研究が多く、長期間にわたって総合的な観点で行われた研究は少ない。その中で、이지원 (2010 : 113-134) によって日韓の文化交流を国家政策的な観点やビジネス的な観点を超えた体系的な検討が必要であるという主張から、歴史的な観点による分析が行われた。

日韓を取り巻く秩序は変わってきた時点は、大きく二つに分けられる。朝鮮・江戸時代の中国中心的な儒教文明から、19世紀末以降、20世紀前半まで続いた西欧中心的な近代文明が中心となったことだ。これを基準として最初に行われた交流として考えられるのは、前近代の朝鮮通信使と儒教的な優越感系を形成されたことである。朝鮮は、儒教文化の発達を基準に、自らの優越性を確認し、相手をへりくだる視線が強かった。友好的な文化交流のイメージとして、認識された「朝鮮通信使」の実状も優越を測る緊張感と葛藤が発見されるのみならず、この優越意識は、その後も残存し、「倭色¹文化」という表現で表出されてきたのだ。

近代は、日本の帝国主義化が進み、新たに近代的優越感系が形成され、先に西洋近代文明を受容した日本が優位に立つようになる。この優越意識は、朝鮮侵略に至り、戦後、現代に入って日韓において文化的接点や交換を呼ぶ大衆的な文化的な交流が形成されない時間が長かった。各国の状況を見てみると韓国では、植民地時代以降、反日民族主義が続き、1990年代初めまでは、「反日感情」が文化交流の必要より優位に立っていた。その反面、日本では、戦争に負け、帝国意識は弱まってきたが、韓国を含むアジアへの「無関心」が続いていた。最近では、日韓交流の数が急増したことに加え、相互認識の質的發展がみられるようになった。インターネットの発展による情報化は、韓国において日本文化開放、日本における韓流ブームを拡散させる起爆剤になり、上から下に移入する形ではなく、自ら会話しあうことで、自然発生的に分散するようになった。

이지원의研究は膨大で、複雑な日韓の文化交流を歴史的な観点に述べている。しかし、戦後以降、日本の「無関心」、韓国の「反日感情」という情勢の具体的な分析は行われていない。そして、1945-1988年の期間を、制限的に行われ

¹ 日本風という意味

た日韓文化交流を「非公式的、部分的な文化交流」と述べた²が、1990年代以降の爆発的な文化交流の拡散における背景には、この時代の動きが基盤になったと考えられる。実際に、尹東柱を中心とした文化交流では、戦後、在日朝鮮人、朝鮮文学に関心を持つ日本人による積極的な紹介をもとに、1990年代からは記念活動が行われ、独特な形で広げられている。この部分については、第4章で具体的に述べる。

2.2 文学を通じた文化交流

文化交流の研究の中でも、文学に焦点を当てた先行研究の数は少なく、特に現代における交流を分析した研究は、文化交流の意義と対策を探る試みが目立った。それは、戦後、日本における朝鮮文学への関心の始まりが、北朝鮮文学であり、長らく政治と歴史への関心が主流となったからだと考えられる。その結果、文学を通じた固有の文化交流の形が見つけ出すよりは、韓国の激しい時代状況を表している作品紹介や翻訳という、個人的な交流として受け入れることが多かったのだ。しかしながら、尹東柱による文化交流が、日本において30年近く記念活動が続けられていることを見ると、彼が書いた文学作品に「普遍的な価値」含まれているかもしれない。次の章では、金素雲、尹東柱の作品から、さらに広まった交流活動について分析したい。

3. 金素雲の作品を通じた文化交流

3.1 生前の交流活動

金素雲は朝鮮の詩心を日本に伝え、日本の知識人にも高く評価されるほど、「現地化」に才能を持った人である。そのため、特に、日本では、彼が書いたエッセイや詩などよりも、朝鮮文学の翻訳が注目された。日韓にわたって、活躍した彼の活動を見ると、1921年、13歳に初めて日本にわたり、東京で、夜間の中学校に入り、勉学をした2年後の1923年、関東大震災が起きた東京を離れ、大阪で生活をする。1928年には、朝鮮民謡の訳稿を持ち、北原白秋を訪ねるが、彼の訳を通して朝鮮の詩心に感動した北原は、その後、金素雲を積極的に紹介する。1933年は、岩波文庫で、『朝鮮童謡選』、『朝鮮民謡選』が刊行され、「朝鮮児童教育会」を設立し、児童雑誌も刊行するが、資金の問題で行き詰まってしまう。1940年は、朝鮮現代詩の最初の訳詩集である『乳

² この時代に制約が多かったが、受容事例は相当部分が存在し、時期別な違いはあると述べている。이지원 (2010) 「역사적 관점에서 본 한일문화교류의 성격과 상호관계의 변화」 『한림일본학』 17, 한림대학교 일본학연구소, pp. 122

色の雲』を刊行し、積極的な著作活動に臨む。1951年には、朝鮮戦争中の韓国で、「大韓日報」で、「木謹通信」を連載し、11月には、その翻訳「日本への手紙」が川端康成の仲介で、「中央公論」に連載された。1957年、一つの日韓文化交流の拠点地として、「コリアン・ライブラリー」の設立を企画し、資金づくりを図っていたが、同胞の協力を得られず、帰国するまで、屈辱と虚無感を感じながら過ごす。その後、活発な著作活動を進める中で、1977年は、韓国ペンクラブから「韓国翻訳文学賞」、79年、韓国随筆文学振興会から「随筆文学賞」、80年には大韓民国銀冠文化勲章を受賞する。翌年、健康悪化のため、闘病生活をする中、11月に自宅で亡くなる。³このほかにも、岩波少年文庫に収録された『ネギをうえた人』のような民話集の出版や、まだしっかりした辞書が無い状況下で高麗書林の『韓日辞典』が与えた影響もかなり大きかった。

このように、翻訳、随筆のような執筆活動にとどまらず、雑誌刊行、企画にも携わり、直接資金調達にも関わるほど、生前の活動は、日韓文化交流の歴史ともいえるほどである。しかし、幅広い活動の裏では、資金調達に苦勞し、同胞から協力を得られないなど、屈辱感も感じていた。さらに、日韓をまたぐ活動について、同胞たちの批判もあった。⁴この批判については、次の節で具体的に論じる。

3.2 作品を通じた文化交流

3.2.1 翻訳を考える見解の違い

金素雲の生涯にかける日韓文化交流活動は、多くの作品を残し、日韓の文化交流の先駆者としての役割を果たしたといえるほど、様々な分野で活躍していた。この項では、彼の交流活動の中で、彼の活動の根幹となる翻訳を見る考え方の違いについて述べたい。

権(2019:141-150)は、『朝鮮詩集』と金時鐘『再訳朝鮮詩集』の比較を通して、翻訳に関する疑問をより広く考えることができると述べた。金素雲が、日本語の韻律に合わせて翻訳した『朝鮮詩集』は、北原白秋のような日本の知識人たちに高く評価されていたが、原文の意味をきちんと伝えてない批判があった。そこで、金時鐘は原文通りに『再訳朝鮮詩集』を翻訳したが、詩が持つ固有の韻律が伝わりにくくなった点で、評価は決してよかったとは言えない。このように、翻訳の仕方はかなり異なる二人であるが、二人は同じく、言語への問題意識から出発し、情緒／抒情、アイデンティティ、詩、そして翻訳へと

³ 金素雲(1989)『天の涯に生くるとも』講談社 pp.331-336 年表を参考して作成

⁴ 前掲、金素雲(1989) pp.246

つながる一連の思考過程を通じて翻訳を考えていたという共通点を持つ。何より注目すべきことは、二人が自分自身の朝鮮語・日本語観と『朝鮮詩集』の翻訳／再訳との関係を自らが明かしていることである。このように、原文をどう翻訳し、伝えるかという問題は、尹東柱作品を翻訳した際にも議論になった問題⁵である。原文通りに翻訳していないという事実そのものよりは、その行為が持つ意図が日本の植民地支配を否定し、「文化的植民地主義」につながるという指摘だ。⁶しかし、権（2019）の研究から見ると、決してそう断言できないことがわかる。翻訳の仕方、翻訳家の意図を考え、評価の基準にするのではなく、それぞれのやり方を尊重する必要があるということだ。「序詩の翻訳問題」以降、5つの翻訳本⁷が出版され、それぞれ比較対象も増えてきた今では、詩を読む読者に選択肢を与え、自ら作品を読み、判断することができるようになったと考えられる。

3.2.2 親日活動への批判

金素雲の親日活動に対する指摘は、同時代を生きた尹東柱とつなげても考えていきたい。金素雲の「親日性」⁸について、大きく批判されていたのは、日本海軍の提督、山本五十六の死を弔った追悼詩を書いたことであった。林（2000：229-233）は金素雲の「りんごとどんぐり論」⁹を引用し、彼を以下のように評価している。

極端な言い方かもしれないが、郷土こそじぶんを支える宗教だと公言しながら、かけがえのない祖国の言葉や文学、文化に強い誇りを感じ、それを日本に知らせることに一生をかけて捧げてきた金の龐大な文筆活動の成果に比べれば、前（日本海軍の提督、山本五十六の死を弔った追悼詩を書いたこと）の親日的文章などはささやかな「どんぐり」にすぎ

⁵ 代表的な議論は、「序詩」の翻訳問題で、「全て死にゆくもの 모든 죽어가는 것」を「生きとし生けるもの」と翻訳したことで、原文の意味を毀損したという批判であった。

⁶ 徐京植『詩の力』高文研、2014、pp. 137-139

⁷ ①伊吹郷訳（1984）『空と風と星と詩：尹東柱全詩集』影書房

②日本基督教団出版局編集（1995）『死ぬ日まで天を仰ぎ：キリスト者詩人・尹東柱』日本基督教団出版局

③上野潤訳（1998）『天と風と星と詩—尹東柱詩集』計画工房

④金時鐘訳（2012）『空と風と星と詩：尹東柱詩集』岩波書店

⑤上野都訳（2015）『空と風と星と詩：尹東柱詩集』コールサック社

⁸ ここでいう親日は朝鮮への日本の支配に加担し、讃えたという意味により近い

⁹ リンゴ（朝鮮語教育）を得るためには、どんぐり（日本文と韓国文の混成）もやらねばならないと比喩した。

ないといったら、はたして私の言い過ぎだろうか。いずれにせよ、祖国の未来を担っていく子供たちのために、悪戦苦闘を強いられながらも児童雑誌の発行にこぎつけた金素雲の愛情は正当に評価すべきである。

日本における金素雲の活動に対して、韓国で批判が起きていることは事実であるが、韓国で彼の随筆は多く読まれ、生前 1980 年には銀冠文化勲章を受けるほど、高く評価された。日本による植民地支配は変化があり、常に強圧的で、朝鮮への認識は全くない中で行われたわけではない。そのため、日本における活動に関しても、朝鮮への関心が高まってきた時代の要求に応じた面も少なくない。その例として、1939 年、40 年には、『モダン日本』¹⁰朝鮮特集版が出版され、朝鮮の文化、文学などが載せられている。一時的なブームにすぎなかったかもしれないが、時代の複合性を読み取ることができよう。

同じく、植民地時代を生きた尹東柱は支配される自分の民族を眺め、悩みと苦しみを受けていた。さらに、被支配国民として乗り越えられない現実の壁にぶつかっていたのも間違いない。当時、尹東柱も高い水準の教育を受けるためには、日本にわたって勉強をしなければいけない現実があった。そこで、彼は「平沼東柱」として創氏改名をし、渡航する直前に書いた作品は「懺悔録」である。自分に与えられていた使命として詩集出版に尽くしていたが、最後まで、朝鮮語の詩集を出版しようとした彼は、生前は出版ができなかった。朝鮮語で出版することを決めつけたのは彼なりの「ドングリをやらない」決心だったかもしれない。

人には誰も「ドングリをやらなければならない」時期があるだろう。どの選択であれ、もはや選んでしまった後に起きる結果で苦しむことも多い。祖国をどれほど愛しているのか、「親日派」として祖国を裏切ったのかという問題ではなく、より重要なのは、「懺悔」かもしれない。人間の選択は一方的な自分の望みでかなえられるわけではなく、社会の情勢と周囲の人々から、多大な影響を受けている。それだけでなく、当時は、正しく思っていたのが、時間が経ち、間違いだったと気づくこともある。自分が、最後まで信じ込んだことが後世の人々には激しく批判される場合も少なくない。だからこそ、たった一人の人生でさえ、判断することが難しく、多面的に行わなければならないのだ。

ここで、金（2017：14-31）は、植民地時代に創作された作品の翻訳に関する研究は翻訳によって生まれた作品への評価のみならず、翻訳に先立って作者の認識と創作の方向性も考量する必要があると述べている。朝鮮語を教育するために、出版する際に、日本語を認めなければいけない選択の中で、妥協した金素雲はどのような気持ちで、選択し、自分の選択に対してどう評価したの

¹⁰ 1939-1940 年にかけて出版された『モダン日本』朝鮮版

かは、以下の文章で読み取ることができる。

私の処世法は合理的ではなかった。どのような場合にも、角を立てず円満に生きることはできなかった。そんな私が二者択一の交換条件を前にして、いつも道をよけて譲ってきた。正しいことなのか、間違っただけのことなのか、その損益計算をしてみたことはない。時には周りでへらへら口をたたくのが聞こえても来たが、私はこれに対して弁明したことも後悔したこともなかった。¹¹

今更、改めて「りんごとどんぐり論」を取り上げて金素雲を批判したいわけではない。金素雲は、自分の選択を後悔したことがないと述べているが、尹東柱は、勉学のため、日本にわたるとき、創氏改名をしなければならない中で、「懺悔録」を書き、自分の行動を深く悔い改めた。さらに、作品活動に関しても、朝鮮語でなく、日本語で詩を出版するとしたならば、より簡単に出版できたかもしれない。それでも、朝鮮語で詩を書き続けると決めた彼だが、その決断は決して簡単に決めたことではなかった。当時、複雑な情勢に心が弱まっていたことも作品から読み取ることができる。

「어머니」

어머니!
젖을 빨려 이마음을 달래여주소.
이밤이 작고 설혀 지나이다.

이아이는 턱에 수염자리잡히도록
무엇을 먹고 잘았나이까?
오날도 힌주먹이
입에 그대로 물려있나이다

어머니
부서진 납人形(인형)도 슬혀진지
별서 오랍니다

철비가 후누주군이 나리는 이밤을
주먹이나 빨면서 새우릿가?

¹¹ 前掲、金素雲 (1989) pp. 284

어머니! 그어진손으로
이 울음을 달래여주세요.
1938.5.28¹²

「お母さん」

お母さん！
乳を吸わせこの心を慰めてください
今宵は頻りに悲しくなります

この子は顎髭が生えるまで、
何を食べ、生きてきたんでしょう
今日も一握りが
口に、そのままくわえさせています

お母さん
壊れた鉛人形も倒れて
もう久しいです

季節雨がじっとり降る今宵を、
拳でもしゃぶりながら、夜明かししましょうか？
お母さん！その賢い手で、
この涙を宥めてください
(筆者 翻訳)

この作品からは、彼の複雑な心が移し出ている。直前に「新しい道」を書き、決心と意思を表したが、直後に書かれたこの詩では、「新しい道」に歩む恐れや弱い心が読み取られる。しかし、なぜかこの詩には多くのバツが書かれ、多くの人々に知られてはいない。彼の中では、このような詩を書いたことに恥ずかしい気持ちがあったかもしれない。

当時、朝鮮の文学者によって、戦争協力を促したことで、後世に「親日派」として批判された事例は少なくない。その中で、蔡萬植は「民族の詩人」で、自分の親日行為を認めて反省と弁明を小説の形式で書いた。この作品は自ら親日行為を反省するほぼ唯一の文学作品といわれるほど、「親日行為」を反省す

¹² 심원섭, 왕신영, 오무라 마스오, 윤인석(1999) 『사진관 윤동주자필시고전집』 민음사 pp. 84-85

ることは珍しいものであった。ここで、登場人物として出てくる「尹作家」は、親日行為をしなくてもいいぐらい裕福だったという描写が興味深い。蔡萬植「民族の詩人」が連載されたのは、1948-49年で、尹東柱の作品が1947年に鄭芝溶によって初めて紹介され、1948年に『空と風と星と詩』が出版されたことを考えると、自然と尹東柱が思い浮かんでくるのも無理ではないだろう。小説の中では、「尹作家」に対して「未試験」¹³の人物で、金持ちだから純白を守られたと批判¹⁴が載せられている。しかし、作品「お母さん」を見ると、彼は、自分の「未経験（未熟）」にも直面していたことがわかる。そこから、生涯にかけて、朝鮮語で詩を書き続けると決め、最後まで行動に移したのは、自分の「懺悔」への証明だったかもしれない。

4. 尹東柱の作品を通じた文化交流

4.1 生前の交流活動

尹東柱は、1917年に生まれ、1945年に亡くなり、植民地時代を生きていた。彼は、日本語で文献を読み、立教大学、同志社大学で勉学した。彼は主に、朝鮮の学生と交流してきたが、尊敬する日本人の先生もいて、帰国を準備していた際に、宇治川の日本人の学生と遊ぶ写真が発表され、日本人学生と交流もしていたことが分かった。¹⁵27歳の短い人生で、学生として亡くなったので、生前は、日韓の文化交流に何か具体的な行動をしたわけでない。朝鮮語で詩集を出版しようとしていたが、結局詩集も出版できずに亡くなった。しかし、死後70年以上たった今でも、彼を記念する活動が活発に行われ、特に日本では、彼が生活していた東京、京都、福岡を中心に30年近く活動が続けられていることは、作品が持つ力で他ならない。

4.2 作品を通じた文化交流

4.2.1 子供への関心

¹³ 実家が裕福なので、筆を折っても食べていける人として描写した。出版社主の金の言葉を借り、「君は君の志操の硬度を試される積極的な機会を持ったことのない人間。合格品であるのか不合格品であるのか、まだそれがはっきりしていない未試験品」と表現

¹⁴ 斎藤真理子（2022）『韓国文学の中心にあるもの』イースト・プレス pp. 250-253

¹⁵ 尹東柱が日本の宇治川で撮った最後の写真は、1995年放送されたNHKの尹東柱ドキュメンタリーを制作していた際に、学友のアルバムから発見された。

尹東柱、金素雲ともに子供へ関心を向けて作品・交流活動を続けていたが、方向性はかなり異なるものであった。金素雲は児童教育に興味を持ち、雑誌を出版することを目指していたが、なぜ子供雑誌を始めたのは、遊んでいる朝鮮の子供たちが意味も分からない日本の歌を歌っていることに驚き、朝鮮語の児童教育雑誌を出そうと決めたのである。¹⁶しかし、出版は資金問題で、失敗も続けていて金素雲には絶望感を与えるもので重もあった。このように紆余曲折の中でも、出版していた児童雑誌は、日本人¹⁷と朝鮮人¹⁸を協力から成り立つものであった。彼が作った雑誌は出資する人により日本文、朝鮮文構成という形で作られる場合が生じ、この行為に批判をする人も多かった。

このように、自ら児童教育のために雑誌を出版し、活動を続けていた金素雲とは違い、尹東柱は朝鮮語で童詩を書くことで、子供へ関心を寄せていた。尹東柱の童詩について이소연(2003: 81-90)によれば、表面的には明るい童心で世界を歌い続けながらも、朝鮮民族に置かれた悲哀と家族・故郷喪失の意識を表出している。しかし、寒くて貧乏な現実を肯定的に乗り越えようとする詩があり、抒情的な表現の中で隠れている民族意識の自覚と克服の意思が感じられると述べた。정성미(2014: 16-18)も、平壤での他郷経験をもとにディアスポラのアイデンティティを具体的に持つようになり、故郷の自然と人々を純粋な童心で記録し、自分の作品を読む読者に絶望を希望として見られるようにしたと尹東柱の童詩を評価した。

このように、金素雲、尹東柱ともに子供へ関心を持ち、関連の文学活動を続けていた。しかし、金素雲は子供雑誌に目を向けて日本、朝鮮の関係者と協力

¹⁶ 前掲、金素雲(1989) pp. 235-239

¹⁷ 総督府関係者、教育関係者、軍人、北原白秋の人脈、児童文学者、新聞関係者、画家など様々な分野の関係者が協力した。金素雲の優れた日本語能力に信頼をもって協力したと考えられる。

나카이 히로코, 김광식(2021) 「김소운 주재 과외아동잡지에 협력한 일본인들」 『근대서지』 24, 근대서지학회, pp. 171-182.

¹⁸ 朝鮮語・日本語混成児童雑誌『新児童』に李箱、鄭芝溶、金裕貞、朴泰遠のような九人会のメンバーの作品が多数収録されている。彼らは、金素雲との個人的な関係性を維持しながらも作品の中で自分たちのアイデンティティと方向性は失っていない。日本の保護と補助、協力の下で朝鮮児童教育会を導いたが、彼が朝鮮の児童たちに伝えようとした近代的知識と学びの機会を否定的に考えず、ともに参加していた。

박영기(2021) 「김소운의 조선어, 일본어 혼성 과외교육 잡지 『신아동』 연구 - 구인회 멤버의 참여와 관련하여 -」 『문학교육학』 72, 한국문학교육학회, pp. 77-96.

して活動を続けてきた反面、尹東柱は子供事態に関心を寄せて童心をもとに自ら作品を書き続けてきたことがわかる。このような方向性の違いから、金素雲は植民地時代という時代的限界から逃れず、資金調達に失敗することで、個人的な生活にも影響が与えられるほど苦しんでいた。同じく植民地時代を生きた尹東柱も朝鮮語で書かれた作品は出版できず、逮捕され解放直前に亡くなったが、今でも絶望の中でも希望を伝える作品として読まれている。

4.2.2 記念活動

1955年、初めて尹東柱が紹介されて以来、90年代以降、尹東柱を記念する活動が広まることで、作品の紹介よりも、記念活動に焦点を当てた新聞記事、雑誌投稿などが増えてきた。このように、尹東柱の作品を知っている人が増えてから広まった記念活動という独特な活動が注目されている。

現在、日本では、尹東柱を記念する詩碑は、1995年、同志社大学に「尹東柱詩碑」、2006年、京都造形芸術大学に「留魂の碑」、2017年、宇治市に「記憶と和解の碑」が建てられた。記念団体は1992年から、京都で「尹東柱を偲ぶ会」、1994年から、福岡で「福岡・尹東柱詩を読む会」、2007年から東京で「詩人尹東柱を記念する立教の会」が活動している。そこから、2020年に入り、日本の尹東柱記念活動がオンラインを通して韓国人も参加するように広がっていると言及した。¹⁹この「尹東柱・詩を読む会」は、引き続き続けられ、2022年11月現在16回目を迎えた。さらに、どこでも参加できるというオンラインの長所から、韓国からの参加者のみならず、アメリカでの参加者もいるなど、より多様な場所で活動を広げている。特に、印象的なのは、読み上げる作品の翻訳の種類が多いことだ。尹東柱の翻訳本が増えていることを反映し、伊吹郷訳（1984年）、上野都訳（2015年）、金時鐘訳（2012年）、李恩貞訳（会の参加者、個別に訳）活動の中でも翻訳に対する議論も行われている。尹東柱研究もより進み、『写真版尹東柱自筆詩稿全集』から、原文も確認し、書き込みや消された部分についても議論の中にも含め、より広い観点で話し合っている。福岡²⁰・京都²¹・東京²²の主に活動を進めている代表が参加しており、今まで活動する中で研究し、経験してきたことを活かせるからだ。そのため、活動の初めは、継続的に詩を読む活動をしてきた福岡の代表、尹東柱の研究を進めていた東京の代表がそれぞれ、司会、資料の準備をしてきた。しかし、2022年から、誰かがリードして運営するのではなく、メンバーがそれぞれ司

¹⁹ 筆者は、2020年9月5日の2回目から参加。

²⁰ 「福岡・尹東柱詩を読む会」2007～現在

²¹ 「尹東柱を偲ぶ会」1994～現在

²² 「詩人尹東柱を記念する立教の会」2007～現在

会とまとめを準備することで、より自発的な活動として作り上げている。この活動から見ると、尹東柱の記念活動は常に変化していることがわかる。引き続き、各地域での活動は続けられながら、さらに、それぞれの活動をつなぐ活動が広げられていると考えられる。

このような記念活動に似た金素雲の作品から広がる新たな文化交流活動は、金素雲の孫である沢知恵による活動であろう。両親ともに牧師である沢知恵は、自らの活動に対しても讃美歌などのキリスト教の教会音楽を中心においている。さらに、金素雲が日本語に訳した朝鮮の抒情詩人・金東鳴の「こころ」という作品に自ら曲を付けたものが高く評価されていた。このように、祖父の活動に引き続き、言葉へ関心を寄せ、新しく活動を続けている。

ここで、さらに、注目したいのは、なぜ尹東柱の作品は、記念活動が活発に行われているのかという問いである。それは、第3章で述べた「懺悔」と関連付けて考えられる。戦後、日韓の文化交流において、日本が「無関心」に向けられたのは、教育の不在をはじめとする戦争記憶の欠如が大きな原因となった。そこで、尹東柱は植民地時代を生きた詩人にもかかわらず、戦争や独立などとした当時の状況をそのまま描くよりは、自然や隣人への愛などといった誰でも共感できる「普遍的な価値」に着目した。そのため、金素雲のように、日本人に朝鮮の詩心を知らせる目標をもって自ら動かなくても、作品そのものによって読者と向き合うことができたのだ。その結果、最初、作品に興味を持ったきっかけはそれぞれ異なっても、彼の作品を好んで読む中で、自然と彼が生きた植民地時代にたどり着け、日本の植民地支配・戦争に直面することになる。さらに、独立運動をした疑惑で亡くなったにもかかわらず、作品の中に、常に罪の意識、悔い改め、自己省察が描かれていることは、支配国に「無関心」だった日本人にとって特に大きな響きとなり、その「反省」の意味としても日本人による記念活動が最も活発に行われている原因となったと考えられる。

大衆的な日韓の文化交流が増えて以来、文学を通じた文化交流にもみられる現象が、作品を新たに自分のものとして発展させることである。尹東柱の記念活動からは、追悼式から毎回詩を読む活動まで、今、改めて作品から読み取れる意味や価値を深めていることがわかる。そして、金素雲は、孫である沢知恵の活動から、翻訳作品をテキストとして新たに音楽として創作し、さらに、自らの個性を生かしながら言葉への関心を広げている。これが今見られる文学による日韓の文化交流の新たな形であり、インターネットの発達によって遠い距離の人とも同時に交流できるようになったため、頻繁で、より多様な人々が作品を中心に文化交流をしていくと考えられる。

5. 終わりに

金素雲、植民地時代を生きながらも、作品活動を続け、日韓ともに生活しながら、朝鮮の詩を日本に知らせ、子供雑誌を作るなど日韓文化交流のために尽くしていた。尹東柱は、植民地時代下の日本で勉学する中で、朝鮮語で詩を書き残したことが、日韓ともに読者に読まれ、さらに、彼を記念する活動として発展していった。このように、金素雲、尹東柱はそれぞれ異なる時代を生き、評価も分かれていたが、植民地時代から戦後社会における困難な状況の中で、人々が国境を越えてともに協力し、助け合うという共通する望みで作品活動をしてきた。同じ目標で作品活動をしてきたものの、生前、出版できなく亡くなったが、死後、70年以上が経ってからも読まれている尹東柱の作品が持っている最も大きな力は、自分の過ちを悔い改めることで、それをただ心で持っているだけでなく、どんなことがあっても朝鮮語で詩を続けることに人々は共感していると考えられる。

金素雲は「故郷が宗教」ということで、祖国を考えた作品を書いたのを見ると2人とも強く信じていた存在があり、それが作品の中でも深く馴染み出ていることがわかる。それぞれの価値観をもとに書かれた作品が読者にどう読まれているかについても今後の課題として、注目しておきたい。

<参考文献>

<一時資料>

- 金素雲 (1978) 『朝鮮民謡選』 (第11刷) 岩波文庫
—— (1988) 『朝鮮童謡選』 (第11刷) 岩波文庫
—— (1989) 『天の涯に生くるとも』 講談社学術文庫
—— (2002) 『朝鮮詩集』 (第9刷) 岩波文庫
金時鐘 (2007) 『再訳 朝鮮詩集』 岩波書店
伊吹郷訳 (1984) 『空と風と星と詩：尹東柱全詩集』 影書房
金時鐘訳 (2012) 『空と風と星と詩：尹東柱詩集』 岩波書店
심원섭, 왕신영, 오무라 마스오, 윤인석 (1999) 『사진판 윤동주자필시고전집』
민음사
北原綴 (1986) 『詩人・その虚像と実像』 創林社
斎藤真理子 (2022) 『韓国文学の中心にあるもの』 イースト・プレス
徐京植 (2014) 『詩の力』 高文研
鞠重鎬 (編) (2007) 『日韓関係のあるべき姿——垂直関係から水平関係へ』 明
石書店

- 鄭榮蘭 (2017) 『日韓文化交流の現代史 グローバル化時代の文化政策:韓流と日流』 早稲田大学出版部
- 芳賀登 (1992) 『比較文化論 : 近代日韓交流史研究を中心として』 教育出版センター
- 権保慶 (2019) 『抒情のアイデンティティ : 金素雲『朝鮮詩集』と金時鐘『再訳朝鮮詩集』』 東京大学博士論文、
- 林容澤 (2000) 『金素雲『朝鮮詩集』の世界 祖国喪失者の詩心』 中公新書
- 團野 光晴 (2007) 「「エグザイル」の可能性 : <日韓・韓日>文学交流研究に向けて」 『金沢大学国語国文』 32, 金沢大学国語国文学会, pp. 34-45.
- 高實康稔 (1997) 「朝鮮侵略の国家責任 -日韓文化交流の阻害要因として-」 『長崎大学教養部紀要』 38(1), pp. 33-46.
- 김광식 (2023) 「김소운의 아동잡지 발간과 조선 설화의 수록 양상 연구」 『연민학지』 39, 연민학회, pp. 183-207
- (2020) 「김소운이 주재한 아동잡지의 소개와 『목마』 창간호」 『근대서지』 22, 근대서지학회, pp. 53-63.
- (2021) 「김소운이 주재한 첫 과외교육잡지 『아동세계』 해제 : 일본어 기사를 중심으로」 『근대서지』 23, 근대서지학회, pp. 413-426.
- 김동희 (2017) 「식민지 체험과 번역의 정치학」 『한국근대문학연구』 18(1), pp. 7-36.
- 김병익 (1985) 「한일문화교류에 대한 몇 가지 성찰」 『기독교사상』 29(1), 대한기독교서회, pp. 140-146.
- 金萬石 (2010) 「윤동주 동시 연구」 『한국아동문학연구』 18, 한국아동문학학회, pp. 175-192.
- 나카이 히로코, 김광식 (2021) 「김소운 주재 과외아동잡지에 협력한 일본인들」 『근대서지』 24, 근대서지학회, pp. 163-194.
- 박영기 (2021) 「김소운의 조선어, 일본어 혼성 과외교육 잡지 『신아동』 연구 - 구인회 멤버의 참여와 관련하여 -」 『문학교육학』 72, 한국문학교육학회, pp. 67-96.
- 박지영 (2010) 「‘번역 불가능성’의 심연 -식민지 시기 김소운의 전래동요 번역(日譯)을 중심으로」 『민족문학사연구』 42, 민족문학사연구소, pp. 274-309.
- 배수찬 (2011) 「김소운의 글쓰기 환경과 번역 작업에 대한 고찰」 『문학교육학』 34, 한국문학교육학회, pp. 213-242.
- 양동국 (2011) 「제국 일본 속의 <조선 시 봄>」 『아시아문화연구』 23, 가천대학교 아시아문화연구소, pp. 107-134.
- 윤상인 (2010) 「번역과 제국과 기억 : 김소운의 『조선시집』에 대한 전후 일본의 평가에 대해」 『일본비평』 2, 서울대학교 일본연구소, pp. 54-87.
- 이지원 (2010) 「역사적 관점에서 본 한일문화교류의 성격과 상호관계의 변화」

- 『한림일본학』 17, 한림대학교 일본학연구소, pp. 111-140.
- 이소연 (2003) 「윤동주 동시 고찰」 『高風論集』 33, 慶熙大學校大學院 院友會, pp. 73-92.
- 정성미 (2023) 「윤동주 동시 연구」 『국학연구론총』 13, 태민국학연구원, pp. 29-49.
- 지명현 (2008) 「재일 한민족 문학과 한일 문화 교류의 의미 —재일 3세대 소설을 중심으로—」 『차세대 인문사회연구』 4, 동서대학교 일본연구센터, pp. 131-145.

韓国在住脱北者における アイデンティティ・ポリティクスと多文化主義

尹 珍喜 (群馬県立女子大学)

<要旨>

北朝鮮を離れて韓国に在住している脱北者の数は、1990年代から年々増加し、その累積人数が3万人を超えている(통일부 2022)。脱北者の出身地、年齢、社会的背景、脱北の動機などが多様化している中、脱北者に対する韓国政府の支援政策にも、民族的な同質性を重視する同化政策から、かれらが持つ文化的な違いを受け入れる多文化主義の視点を取り入れるべきであるという声が高まっている。本研究では、脱北者が韓国社会への適応に抱える問題の対処戦略としてのアイデンティティ・ポリティクスを当事者の語りの内容から分析し、韓国社会における多文化共生の可能性を探ることを目的とする。使用するデータは、2013年から2023年にかけて韓国に居住する脱北者男女を対象に実施した聞き取り調査の内容である。かれらが北朝鮮での生活や脱北の過程、韓国での生活について語る際に、韓国人、北朝鮮人、脱北者がどのように用いられているかについて分析した。

キーワード 脱北者、アイデンティティ・ポリティクス、多文化主義

1. はじめに

北朝鮮を離れて韓国に在住している脱北者の数は、1990年代から年々増加し、2022年現在、その累積人数は33,882人に至る(통일부 2022)。脱北者の脱北動機は、1980年代までは南北間の政治対立の中で政治的理由による亡命者が主であったが、1990年代から経済的な理由による脱北者が急増した。2000年代以降は、「安定した生活を求めるため」、「韓国にいる家族と合流するため」など脱北動機も変化しており、北朝鮮での出身地や年齢、社会的背景も多様化している。これに伴い、韓国政府における脱北者の位置づけも、国家有功者から経済的難民、そして移住民へ変化してきた。

脱北者は、韓国人と「民族共同体」の一員であり、憲法が規定する大韓民国の国民であるため（통일부 2021）、韓国入国と同時に自動的に韓国国籍を付与される¹。それゆえ、脱北者は、朝鮮族などの海外同胞、結婚移住者、帰化者とは明確に区分され、独自の支援政策が行われてきた。つまり、脱北者が長年にわたる南北断絶で生じた政治・社会・文化などの相違を理解し、韓国人としての同質性を回復することで、遅滞なく韓国社会に適応できるという同化主義を中心とした支援政策が実施されていた。それが近年、外国人流入の増加により多文化社会へ移行する韓国社会において、脱北者に対する支援政策にも多文化主義の観点を取り入れるべきであるという声が現れるようになった。

本研究では、韓国に在住する脱北者への支援政策における同化主義と多文化主義の論点を整理した上、脱北者が韓国社会への適応に抱える問題の対処戦略としてのアイデンティティ・ポリティクスを分析することで、韓国社会における多文化共生の可能性を探ることを目的とする。

2. 先行研究

2.1 脱北者支援政策における同化主義と多文化主義

韓国に在住する脱北者に対する韓国政府の支援政策は、脱北者は「民族共同体」の一員であり、未来の国家統合に向けて特別な役割を果たす存在であるため、民族的な同質性を回復する方向で実施されていた（김현정・박선화 2016）。また、脱北者に関する研究においても、脱北者の社会統合に注目し、かれらがいかに韓国社会に同化されているかに焦点を当てた内容が主流であった（Choi & Park 2011）。脱北者は、韓国人らしい言葉（訛り）、身振り、服装、生活様式などを積極的に身に付けていることを求められ、文化装置の受容の程度から韓国社会での適応を判断されていた（Lee 2011）。つまり、脱北者は法的には「韓国国民」であるものの、社会的・文化的には「韓国市民」として認められておらず排除の対象になっていたのである。

一方、近年の韓国社会では、結婚移住者など外国人の流入に伴って多文化主義への関心が高まる中で、脱北者に対する支援政策においても多文化主義の観点を取り入れるべきであるという主張が現れるようになった（김창근 2016；김현정・박선화 2016）。つまり、韓国人と脱北者の民族的同一性にこだ

¹ 「北韓離脱住民の保護及び定着支援に関する法律」（いわゆる、「北韓離脱住民法」）第2条では、「北韓離脱住民（脱北者）とは、軍事境界線の北側地域（北朝鮮）に住所、直系家族、配偶者、職場等を置いている者で、北朝鮮を離れた後、外国国籍を取得していない者」と規定している。

わるよりも、脱北者は韓国人とは異なる文化とアイデンティティを保持するマイノリティであり、不利益や差別の対象者であることを認めることで、脱北者が抱えている問題をより明確に浮き彫りにすることができ、韓国人にとっても脱北者との文化的相違を受け入れやすくなるという考え方である (Yoon 2010; 2014)。実際、脱北者の中には「同胞＝同じ文化の保持」という考え方にに基づき、脱北者の文化的特性を無視して韓国人らしい振る舞いを強要されることに違和感を感じ、適応に苦しむ場合も少なくない (Park 2020)。さらに、韓国社会で居づらさを感じる者の中で、第三国に向けて「脱南」したり、時には北朝鮮に戻るケースも発生しているのである。しかし、ここでの多文化主義という用語は、韓国人と脱北者がどのように共生できるかに対する「民族主義」の異なる形として用いられているとも解釈することができる (류이현 · 이덕로 2021)。

2.2 脱北者におけるアイデンティティの形成

韓国に在住する脱北者は、歴史的・法的・政治的・社会的に異なる位置づけに置かれている (강진웅 2011)。まず、脱北者は、歴史的に「民族共同体」の一員であり、南北分断以前の歴史と言語や文化の一部を共有する同胞として位置づけられる。そのため、韓国人は脱北者に対して他国から来た移民よりも親密感を抱きやすく、未来の統一を備えるために手助けになる役割を果たす存在であると認識している。また、韓国の憲法では、韓国領土が「朝鮮半島及びその付属島」と定義されており、脱北者は法的に韓国国籍を持つ国民として位置づけられている。一方、北朝鮮は朝鮮戦争を起こした敵対国であり、長年の政治対立が続いていることから、脱北者は政治的な敵対国の出身者であるという偏見と差別の対象となる場合が多い。さらに、脱北者は他国からの移民と同様に韓国社会での適応をめぐる様々な困難を抱えており、社会的なマイノリティ・グループに位置づけられている。

このような脱北者に対する重層的な位置づけは、かれらのアイデンティティ形成に混乱をもたらす原因となっている (이명수 2014)。その中で若い脱北者を中心に、北朝鮮と韓国の文化的・社会的差異に直面し、双方の文化の中での自分の位置づけやアイデンティティを模索する過程において複数のアイデンティティが重なり合い、インターナショナルなアイデンティティを形成する動きも見られる (Park 2020)

3. 調査概要

分析に使用するデータは、2013年から2023年にかけて韓国に在住する脱北

者を対象に実施した聞き取り調査で得た語りの内容から用いた。調査対象者は、脱北動機が多様化した 2000 年以後に北朝鮮を離れて、調査時に韓国の首都圏（ソウル、京畿道など）に居住する 20～40 代の脱北者男女に限定した。対象者の選別は、調査協力者である脱北者から複数の脱北者を紹介してもらい、調査を引き受けた脱北者に他の対象者を紹介してもらおうというスノーボール方式で行った。質問内容は、脱北前の北朝鮮での生活、脱北の動機及び脱北の経緯、韓国入国後のプロセス、韓国での生活、所属するコミュニティなどについて語る中で、自らのアイデンティティをどのように表現するのかについて注目した。調査場所は、対象者の語りの内容が他人に聞こえないように、対象者の自宅や大学の空き教室などを選択した。聞き取りを実施する前に、対象者には調査の趣旨とデータ使用の倫理について説明し、許可を得てから録音を行った。

本調査は、調査対象者の個人的かつ内面的な経験にかかわる内容について聞き取りをしており、特に、脱北者の場合、内容によって本人が特定され、北朝鮮で生活している家族や親族に被害が及ぶことに強い危機感を抱くことがある。そのため、一般社団法人日本家政学会家族関係学部会の倫理指針に基づき、調査対象者の特殊性に十分に配慮し、対象者の人権とプライバシー保護のため、得られたデータに本人が特定されないように細心な注意を払った。

4. 結果

韓国に在住する脱北者の語りから、韓国社会への適応という壁に対処するために自らのアイデンティティを積極的に操作する姿が確認できた。かれらは時には「北朝鮮人」であるというアイデンティティを明示せず、また時には隠し、「韓国人」としての自己提示を行うことで韓国社会のコミュニティに溶け込んでいこうとした。法的な「韓国国民」であるだけでなく、社会的に「韓国民」になるために、韓国人らしい言葉（訛り）、身振り、服装、生活スタイルなどの文化的要素を積極的に受容し、「韓国人」としての同化意識を表していた。また、社会階層移動に限界が存在した北朝鮮での経験から、自らの努力によって社会的地位が獲得できる韓国社会のシステムに魅力を感じ、脱北者のための代案学校ではなく韓国人学校を選択し、大学進学に進み、韓国人と同等の就職を通じた社会的地位の獲得を目指していた。しかしながら、その過程でかれらは北朝鮮に関連する文化や生活様式から距離を置き、時には脱北者コミュニティを否定する動きも見られ、これが内面の葛藤の原因となっている。さらに、「韓国人」と比較して同等の結果が得られない現実や韓国社会に根強い脱北者への差別意識に直面したとき、自己否定や矛盾に陥ることにつながる。

一方、脱北者の語りでは、「北朝鮮出身」という自身の背景を受容し、韓

国社会を生きる中で「韓国在住の北朝鮮人」というアイデンティティを保持しようとする姿が確認できた。かれらは、韓国に在住する脱北者数の増加に伴い、同じ境遇にある脱北者同士のコミュニティを形成することが可能になり、「韓国人」とは異なる「北朝鮮人」としての自己提示を行うことで、韓国社会で「二等市民」であることを内面化するのではなく、自らを一つのエスニック集団として意識していた。また、「韓国人」として同化するために努力するより、自ら「北朝鮮人」として自覚し、脱北者同士で「脱北」という特殊な経験を共有することで自己肯定感を保ち、韓国社会との関わりに肯定的な影響を与えていた。また、北朝鮮と韓国の統一が実現した時は、地元に戻って地域発展に貢献する希望を抱いていた。しかし同時に、かれらは「韓国在住の北朝鮮人」としてのアイデンティティが北朝鮮の文化措置を肯定するものではないという矛盾に気づいたり、自らの立ち位置が韓国社会から乖離していることに不安を感じる場面も見られた。このような自己提示の操作は、韓国社会で脱北者が置かれている差別構造の反映とも考えられる。

また、脱北者の語りから、「韓国人」と「北朝鮮人」のどちらにこだわらず、「脱北者」として多文化的なアイデンティティを自己提示している姿が確認できた。かれらは、自身の北朝鮮の背景を保持しつつ、韓国の文化や価値観を受け入れることで複雑なアイデンティティを形成することが可能であり、北朝鮮の文化に親和感を持っていることが韓国の文化に馴染めないことを意味するわけではなく、両方の文化を同時に保持することが可能であると認識していた。さらに、かれらの中には、北朝鮮を離れた後、中国、タイなどの第三国に滞在しながら多様な文化を受容し、韓国に入国した後も中国やアメリカなどを行き来しながらトランスナショナルなアイデンティティを強化する側面も見られた。特に、母親が脱北した後、中国滞在中に生まれた子どもの場合、母親から伝授した北朝鮮の文化と、自ら経験した中国の文化と韓国の文化が入れ混ざったアイデンティティを形成することになる。かれらは、このような文化的多様性を保持する自らの特徴を生かした仕事へ挑戦し、自分の体験をメディアを通じて発信するユーチューバーを目指したり、北朝鮮にいる人々の生活改善のために国際的な舞台で活動家として活躍することにより、自己の価値を確認しているのである。

ところが、脱北者の中では、韓国社会において脱北者に対する多文化主義の観点に違和感を感じる場合も確認できた。脱北者は韓国人と同じ歴史、文化、言語を共有する同胞であるため、他の移民グループと区別される位置づけにあるにもかかわらず、脱北者家族を「多文化家族」として扱うのは「韓国国民」としての権利が侵害されることになると認識されていた。このような語りは、韓国社会における多文化主義への関心は肯定的に考えられる一方で、脱北者を多文化主義の対象として位置づけることには抵抗感を抱いていた Kim & Yoon

(2015) の研究結果とも一致している。

5. おわりに

1990年代以降、韓国は海外から様々な背景を持つ人々が入国するようになり、確実に多文化社会へ進行している。また、脱北者も一つのマイノリティグループを形成しながら韓国社会に共存している。従来 of 韓国政府の脱北者支援政策では、脱北者が韓国人と同民族であることを強調し、政治的、社会的、文化的な異質性を持つ存在であることに目をつぶっていたといえる。脱北者支援政策における同化主義への反省から、今後、多文化主義の観点を取り入れる際には、当事者である脱北者の認識を十分に理解した上で慎重に進める必要がある。実際に脱北者は複合的なアイデンティティを形成しており、時にはアイデンティティを戦略的に操作することもある。それゆえ「〇〇人」という国家単位のアイデンティティ形成にこだわるより、社会統合の観点から市民としてのアイデンティティ(citizenship)を身に付けることが重要であり、その際、多文化主義の視点は力を発揮するのではないか。

<参考文献>

- 강진웅 (2011) 「한국 시민이 된다는 것 : 한국의 규율적 가버넌스와 탈북 정착자들의 정체성 분화」 『한국사회학』 45(1), 한국사회학회, pp. 191~227.
- 김창근 (2016) 「다문화시대 북한이탈주민정책의 개선 방향」 『윤리연구』 109, 한국윤리학회, pp. 197-233.
- 김현정·박선화 (2016) 「다문화정책 관점에서 본 북한이탈주민 문제」 『통일인문』 66, 건국대학교통일인문학연구단, pp. 161-196.
- 류이현·이덕로 (2021) 「탈북자와 다문화가족 정책담론 비교 연구—WPR (What's the Problem Represented to be) 접근을 기반으로」 『현대사회와 다문화』 11(4), 대구대학교다문화사회정책연구소, pp. 131-164.
- 이병수 (2014) 「탈북자 가치관의 이중성과 정체성의 분화」 『통일인문학』 59, 건국대학교통일인문학연구단, pp. 121-150.
- 통일부 「북한이탈주민정책, <http://www.unikorea.go.kr>, 2023. 8. 16 열람
- 통일부 (2021) 『2021 북한이탈주민 정착지원 실무편람』
- Choi, D. S. & Y. J. Park (2011) “Research Trend and Tasks of Policy

- Research on North Korean Defectors,” *Korean Journal of International Relations*, 51(1), 187–215.
- Kim, Y. S. & I. J. Yoon (2015) “Multiculturalism Is Good, But We Are Not Multicultural: North Korean Defector Students' Perceptions of Multiculturalism,” *The Korea Educational Review*, 21(2), 325–350.
- Lee, S. J. (2011) “Education for Young North Korean Migrants: South Koreans' Ambivalent “Others” and the Challenges of Belonging,” *The Review of Korean Studies*, 14(1), 89–112.
- Park, Y. A. (2020) “North Korean Migrants in South Korea: ‘Multicultural’ or ‘Global’ Citizens?,” *Korean Studies*, 44, 123–148.
- Yoon, I. J. (2010) “Multicultural Minority Groups and Multicultural Coexistence in Korean Society,” *Korea Observer*, 41(4), 517–557.
- Yoon, I. J. (2014) “From a Migrant Integration of Distinction to a Multiculturalism of Inclusion,” G. Battistella (ed.), *Global and Asian Perspectives on International Migration*, Switzerland: Springer International Publishing, 101–117.

想像された祖国

—韓国訪問在日のナショナル・アイデンティティ変化過程を中心に—

車 必立（西江大学大学院社会学修士課程）

<要旨>

本研究は、在日 3・4 世代が先祖の故郷である韓国を訪問し、そこで経験するナショナル・アイデンティティの変化の過程を明らかにする。2022 年に韓国に居住した経験のある研究参加者 4 人を対象にパイロットインタビューを実施した上、現在までに計 20 人を対象に深層インタビューを行った。その結果、既存の研究で議論された文化資本の観点と韓国の排他的・二分法の社会構造が確認されたが、アイデンティティの変化過程で文化資本よりも多大な影響を及ぼすのは、想像された祖国に対する様々な表象と本国での行為戦略であることであった。したがって、本研究は、韓民族帰還移住のナショナル・アイデンティティ研究において、移住後の生活だけでなく、移住前と移住後のアイデンティティと経験の相互作用に、より多くの関心を持つべきであると主張する。

キーワード 在日, 在日コリアン, ナショナリズム, ナショナル・アイデンティティ, 帰還移住, Koreans in Japan, Ethnic return migration

1. はじめに

本研究は、韓国にて居住経験のある 3 世代・4 世代の在日青年のライフヒストリーを根拠理論を通じて分析することによって、韓国生活の経験が彼らのナショナル・アイデンティティに影響を与える過程を説明する。安定した国民国家の中の一構成員として生まれ育つ個人にとって、民族性、国民性、ナショナリズムは、まるで空気のようにあり、日常的には認識されるものではなく、自然である。一方、韓国と日本という二つの国民国家の境界線で生きる在日にとって、ナショナル・アイデンティティとは、絶え間ない意識的あるいは無意識的な自己規定と他者規定を通じて構成される、より流動的・分裂的・重層的な性格を持つ連続的な過程であるといえる¹。したがって、本研究は、研究参加

者が韓国での経験を通じて形成したアイデンティティも、固定不変のアイデンティティ (identity) というよりは、その後の人生経験と持続的な影響を与え合う要素として、アイデンティティ形成過程 (identification) の一部分として捉えようとする。

具体的に、本稿ではまず 3・4 世代在日のナショナル・アイデンティティが、在日の生まれ育った日本で形成される過程を略して説明した上、韓国訪問在日に関する先行研究を分析する。そこで先行研究の限界点を明らかにした上で、母国訪問者としての在日に関する新たな分析的アプローチが必要であることを主張し、本研究の紹介とともに研究方法を説明する。韓国と日本という二つの社会空間を行き来する新世代在日のアイデンティティ形成過程の探求は、単に在日のナショナル・アイデンティティに対する新たな議論であるだけでなく、グローバル移民時代における日韓両国のナショナリズム、韓民族ディアスポラの子孫の生活、在外同胞に対する韓国社会の(再)認識などに対する全体的な省察への注文でもある。

2. 3・4 代目在日のナショナルアイデンティティ

在日の世代が入れ代わるにつれて、その同質の民族意識が次第に弱体化したことは、多くの研究者が共通して指摘するところである。(윤일성, 2003; 김현선, 2008, 2009; 최영호, 2008; 지충남, 2018) 1980 年代以降、在日社会の多数を占めるようになった 2・3 世代のほとんどは、日本で生まれ育った者である。そのため、2・3 世代にとって和式的生活習慣や文化の方が、韓国式より馴染み深いのは当然のことである²。朝鮮学校あるいは韓国学校に在学中の在日を除けば、母語使用の割合は著しく低下し、多くの在日は日本系学校に進学する傾向である。(윤일성, 2003) 在日共同体内部の世代変化と併せて、日本政府の積極的な同化誘導政策の推進(지충남, 2018)、既存の民族共同体の結束力の低下と、日本社会における新自由主義の価値観の拡散(川端, 2012)も、在日青年の民族意識の衰勢を引き起こす主要因として指摘される。

大阪と神戸地域に居住する在日 133 人を対象として実施された 윤일성 (2003) の研究によると、世代が下がるほど在日の韓国民族あるいは朝鮮民族としてのアイデンティティ意識が弱まる傾向が顕著である。世代を重ねるにつれて、在日のナショナル・アイデンティティを構成する核心要素が「母国」あるいは「母国のもの」から、生まれ育った日本社会とそこで共に生きる在日共同体へ移行していくのである。しかし、世代を重ねるたびにナショナル・アイデンティティが単に弱体化し消滅するのではなく、別の形への変化、あるいは多様化して維持されるという主張も存在する。その主張によると、伝統的に民族性を

表していると考えられていた生活要素の弱体化や、あるいは3世代以降の在日が母国の韓国人や1世代とは異なる生活様式をとる現象が、必ずしもナショナル・アイデンティティ自体の消滅を意味するわけではない。このような文脈で、임영언(2016)³は3世代以降の在日のナショナルアイデンティティの質的変化を、장인성(2003)⁴はナショナルア・アイデンティティの多様化を示している。

韓流の影響もまた、新しい世代の在日を取り巻く日本社会の認識とナショナル・アイデンティティに大きな影響を与えるようになったが、이항진(2011)によると、2010年代以降、韓国ドラマとK-popブームは日本の若い世代にとって韓国社会に対する親和性を高め、その結果、在日朝鮮人と韓国人に対する日本社会のイメージを再構成する上で決定的な役割を果たした。韓流ブームは日本社会で否定されていた在日の存在を可視化し、これは新しい世代の在日が自分の民族的ルーツを恥じないようにした。つまり、日本で韓流は、在日が自分の民族的ルーツをよりポジティブに認識し、発展できるようにする重要なメカニズムとなったのである。(金知榮, 2010)

以上の議論を総合すると、在日社会の世代が入れ代わり、外部環境が変化するにつれて、民族意識が弱体化、多様化、象徴化されており⁵、同時に日本社会の韓流ブームは、以前の1・2世代在日とは異なり、在日青年が新たな方法で自分の民族的ルーツを受け入れるきっかけとなっている。しかし、その議論はいずれも在日社会の集団的な傾向に関する議論であることを看過してはならない。지충남(2018)が明らかにするように、(たとえ同じ世代であっても)結局、在日個人のナショナル・アイデンティティは自分たちと直接・間接的な利害関係の有無によって異なるものである。これは、在日アイデンティティの探求において、個人の経路(routes)の重要性を改めて想起させる。

3. 先行研究 - 母国訪問者としての在日について

3.1 母国訪問者⁶としての在日

在日という表現から読み取れるように、在日の主な生活空間は日本本土であり、その日常における主な他者は日本人である。したがって、在日に関する理論と言説が、日本社会の中で少数民族として生きる存在としての生活に焦点が当てられてしまうのは当然である。しかし、植民地化と冷戦という歴史的局面を過ぎ、脱国境的経験が日常化する現代社会において、(김예림, 2009)在日の生活の領域は日本に限られず、その他者も日本人だけなわけではない。つまり、グローバル化が進み、日韓間の人的・物的資源の交流が日常化するにつれて、在日と韓国社会の接触、在日と韓国人との相互作用もさらに頻繁になっているのである。

ここ数十年、世界各国では民族主義や経済的理由などを基に、海外在住国民の (co-ethnics) 帰還が奨励されてきた。(Fox, 2007; Cook-Martin and Viladrich, 2009 : Son and Shin, 2020 再引用) これは韓国も同様で、1990年代以降、国内に移住する在外同胞の数が増加し(윤인진, 손지혜, 이종원, 2020)、自分の世代に海外に移住した移住当事者ではなく、その子孫の祖国訪問(ancestral homeland)に焦点を当てた研究も徐々に増えている。(윤다인, 2014)しかし、在米同胞、在中同胞、高麗人などの母国訪問に関する研究と議論が学界内外で蓄積・発展してきたのに比べ、母国訪問者(Ethnic return migration)としての在日同胞に関する韓国国内の研究は少数に過ぎない。

3.2 在日の韓国訪問に関する先行研究

在日の韓国訪問に関する先行研究は、大きく(1)文化資本論 (2)排他的社会構造論 (3)ロマン主義的アプローチ (4)類型論の四種類に分類できる⁷。まず、文化資本論的視点は、在日アイデンティティの主な構成要素、そして在日が韓国訪問にて経験する困難の主な要因を、特定の文化資本で説明するアプローチである。이정훈(1997)によると、母国訪問者たちは韓国と日本の文化の違いを実感する際、韓国人でもなく、日本人でもない自分を発見することになる。김예림(2009)は、そのアイデンティティ構成と実践を把握するためには、文化資本に対する考察が必要であり、在日の文化資本は、日本で生まれ育ちながら習得された居住地基盤文化資本と、家庭と学校生活を通じて習得・学習されたナショナリスティックな文化資本は、母国志向的文化資本で構成され、このような複数の境界的文化資本の月経的運用がそのアイデンティティの変化に影響を及ぼす核心メカニズムであると主張する。この他にも様々な研究が共通し、母国訪問在日の韓国文化に対する未熟な熟知、韓国語能力の不足などの文化資本の欠如・差異が母国でのアイデンティティ変化の核心メカニズムであると指摘している。しかし、このような文化資本的なアプローチを取る場合、母国訪問者のアイデンティティ交渉及び変化過程が文化(資本)還元論的に解釈される危険性がある。すなわち、在日のアイデンティティを日本的・韓国的文化資本の結合とみなすこととなり、その結果、ナショナル・アイデンティティを特定の文化資本の獲得と同じものとして解釈することになる。この場合、文化資源の不足にもかかわらず自分を韓国人として定義すること、あるいは文化資源が十分であるにもかかわらず自分を韓国人としてアイデンティティ化しない現象などが説明できないだけでなく、アイデンティティの中核をなす他者の認識と主体の能動的なアイデンティティ交渉過程、その結果として起こるアイデンティティ変化の過程が説明できなくなる。

第二は、韓国社会の排他的な社会認識構造を批判するパターンの研究である。該当研究によると、韓国社会は極めて閉鎖的な単一民族主義をとっており、

このような観点から、日本で生まれ育った在日は文化的・政治的に偽の韓国人として規定されるということである。(김진환, 2014, 2015) アイデンティティの交渉及び変化過程は、個人と社会との有機的な相互作用過程の中で、継続的に構成されていく過程である。したがって、韓国社会の差別的・排他的な社会構造に対する探求は、母国訪問者が経験する経験及びアイデンティティ形成過程の研究と不可分な関係にあるといえる。しかし、社会構造だけを強調し説明すると、なぜ多様な個人が母国訪問の経験を通じて異なるアイデンティティ交渉や変化の過程を経験するのかが説明できなくなる。つまり、排他的社会構造論の観点を取る場合、個人の能動的なアイデンティティ交渉の過程が死産されるのみならず、多様な母国訪問者が経験するアイデンティティ変化の違い目を体系的に説明することに限界がある。

第三に、一部の研究は国民国家の境界に位置する在日の存在論的特性に注目し、在日を自らの存在論的特性、境界人としての特性を活用して国民国家の境界を越境する月経的行為の主体として捉えている。(김예림, 2009; 유진아, 2021) これらの研究は、国民国家の巨大言説の中で自分に与えられた様々な資本とネットワーク、生の機会を活用し主体的に自分の生涯を構成し、国民国家の論理の中で否定的に認識されていた自分の境界的アイデンティティをポジティブに認識していく在日の能動性、主体性を強調する。しかし、このようなロマン主義的なアプローチを取る場合、特定の英雄的個人の達成が母国訪問在日の全ての事例として一般化され、なぜ在日がこのような月経的主体になるしかなかったのか、そして脱国境的主体性にもかかわらず、依然として存在する不安で不完全な文化市民権(cultural citizenship)についての議論が見過ごされる危険性が存在する。(김예림, 2009)

最後に、最近になって母国訪問在日のアイデンティティ変化過程を扱った多くの先行研究(김예림, 2009; 조경희, 2011; 윤다인, 2014; 김이향, 2017; 유진아, 2022)は、母国訪問在日のアイデンティティが韓国社会で経験するめいめいの経験とアイデンティティ交渉を通じて、それぞれ異なる方法で再構成されることを示している。しかし、アイデンティティ変化の体系的な類型化にもかかわらず、多数の研究は、なぜ母国訪問者が訪問後に持つアイデンティティ(decentered identity)が異なるのかに対する体系的かつ統合的に説明せず、部分的な事例の列挙にとどまり、もしくは(1)文化資本論、(2)排他的社会構造論に頼る原因でアイデンティティ変化を説明するだけである。したがって、先行研究で導き出された文化資本論、排他的社会構造論、ロマン主義的アプローチ、類型論などが持つ現象に対して、部分的な説明は取るが、母国訪問在日の異なるアイデンティティ交渉及び変化過程に対する体系的かつ統合的な説明を提供するため、新たなアプローチが必要だと考えられる⁸。

4. 研究紹介

したがって、本研究は、先行研究の知的伝統の中で、次のような研究質問に答えようとする

- (1) 在日 3・4 世代は、最近の日本社会においてどのようなナショナル・アイデンティティを形成形成していくのか？
- (2) 在日 3・4 世代はどのような理由で韓国を訪問し、その訪問動機は日本で形成したナショナル・アイデンティティとどのような関連性を持つのか？
- (3) 在日 3・4 世代は韓国でどのような経験をし、韓国社会での経験はそのナショナル・アイデンティティにどのような影響を与えるのか？

上記の研究質問に答えるため、本研究はまず、個々の研究参加者の韓国訪問前までの日本での生活を通じ、どのようなナショナル・アイデンティティを形成してきたかを把握した上、彼らの母国訪問の動機と韓国生活での経験、そしてナショナル・アイデンティティの変化過程を分析する。その上、根拠理論を通じて、対象者が日本で形成したナショナル・アイデンティティが異なる核心的変数と、韓国経験後にナショナル・アイデンティティの異なるという変化を持たせた核心的変数を見つけ出し、概念化し、最終的に理論化する。

5. 研究方法

2022 年 4 月から 6 月にかけて、韓国訪問経験のある 3 人の第 4 世代在日を対象に、パイロットインタビューを行った。その後、2022 年 9 月から 2023 年 5 月にかけて、インタビュー時点を基準として、韓国のソウル、原州、公州、そして日本に居住している 20 人の在日を対象に、半構造化した深層インタビューを行った。研究参加者はすべて以下の条件を満たした。(1) 日帝強占期前後、先祖が日本に渡った民族的ルーツを持つ 3 世代、あるいは 4 世代の在日 (2) 本人が日本で生まれ育った者 (3) 最近 5 年以内、韓国に観光やイベントなど短期的な目的ではなく、6 ヶ月以上生活するために韓国に来た者。研究参加者は snowballing 方式で募集した。

深層インタビューの前、対象者全員に電話で研究の目的と内容、そして研究の全過程にて匿名性と個人情報保護されることを説明した。現在日本に居住している研究参加者を除き、すべてのインタビューはソウルと原州、公州な

ど、インタビュー対象者の都合に合わせた場所で行われ、平均して約 3 時間 30 分程度の時間がかかった。すべての研究参加者に共通して次のような質問 - 在日としての家族の歴史、教育課程、日本での生活、韓国訪問のきっかけ、韓国訪問前、韓国での生活、韓国での生活に対する考えや評価など - を行い、その後、各個人の人生の過程に合わせて追加の質問をした。インタビューを実施する際の言語は、研究参加者の言語運用能力を考慮し、韓国語と日本語を混合して実施した。インタビュー後、該当内容を整理した上、根拠理論を通じてコーディング、カテゴリー化、概念化の過程を経て分析した。

6. 焼結と限界

研究参加者は、日本で各自異なる方法でナショナル・アイデンティティを形成していった。特に、その過程で民族コミュニティ活動の参加の有無、民族教育の有無、家族の背景、個人の経験、本人と家族の国籍などがアイデンティティ形成に重要な役割を果たした。研究参加者が韓国を訪問した各々の具体的な動機は異なるが、参加者の大部分は共通して自分のルーツを探し、確認するために韓国を訪問した。しかし、このような動機とは違い、大多数の研究参加者は韓国生活の途中で、在日に対する韓国社会の無知、日本人扱いなどを経験した。彼らはこのような状況ごとに、自分が持つ文化的、社会的資本などを動員してアイデンティティ交渉と認識闘争を展開していった。多くの研究参加者は韓国生活以降、ナショナル・アイデンティティの変化を経験し、その過程には日本で形成したアイデンティティと様々な資本、そして韓国での個人の主体的行為戦略と構造的要因が決定的な影響を及ぼした。

しかし、先行研究の分析でも説明したように、アイデンティティとは文化資本だけでなく、ジェンダー、社会的ネットワーク、個人の生活経路と経験など、様々な要因の総合的要素で構成され、それはまた固定的なものではなく、個人と構造との相互作用の中で絶え間なく変化していくものであるため、流動的で非決定的である。したがって、研究参加者が今後、日本・韓国での生活を通じて新たに自分のナショナル・アイデンティティを形成していく要因が多々あり、その局面では、現在までの経験やアイデンティティが重要な変数として作用しない可能性もある。それにもかかわらず、本研究は母国訪問の初期過程で特定の変数がナショナル・アイデンティティの変化過程に重要な役割を果たしたことを明らかにした。

しかし、限られたサンプル数のため、韓国を訪問した在日 3・4 世代をすべて代表することはできないこと、研究参加者の韓国訪問期間と目的が各自異なること、研究参加者の性別が女性に集中していること、日本国籍および朝鮮系

研究参加者の数が少ないことなどは、今後の追加研究を通じて補完する必要があるだろう。

6. 終わりに

在日のアイデンティティとは、単に日本社会で生きる民族的少数者の話に限定されない。その存在自体が、韓国と北朝鮮、そして日本との歴史と関係、日本の少数者政策、韓国の同胞政策など様々な社会的、構造的要素が錯綜した結果であるからだ。したがって、3・4世代の母国訪問による在日のアイデンティティに関する議論は、今後、韓国と日本、そして北朝鮮社会の歴史的過去を振り返る貴重な起点となるだろう。同時に、増え続ける韓民族ディアスポラに対して、政治的、制度的な反省だけでなく、在日の存在に対する韓国社会のより根本的な再認識が必要だという要請でもある。

<注釈>

- 注 1 アイデンティティ概念は、実証主義的観点と構成主義的観点へ分類できる。前者によると、ナショナル・アイデンティティとは固定不変の静的なものとして、個人が共有する同質的で本質的な一つの実在である。一方、後者によると、アイデンティティとは主体と他者との間の持続的な相互作用を通じて変化し、再構成される流動的な性格を持つ。存在論的な観点から、前者は本質主義あるいは実体主義に基づき、後者は関係主義あるいは相対主義に基づくと見ることができる。(은용수, 2022) 本研究では構成主義的な観点に基づき、ナショナル・アイデンティティとは固定された安定した一つの実体というよりは、継続的な相互作用過程を通じ、絶え間なく変化し形成されていく一種の過程という立場をとることとする。
- 注 2 特に民族意識と母国文化の教育を家庭内で担当していた 1 世代が徐々に消え去り、民族という共同体の意識が形成される条件も変化するようになった。(윤일성, 2003)
- 注 3 임영언(2016)は、ゴードン(Gordon, 1964)の同化理論と象徴的アイデンティティ(Symbolic ethnicity)に関するガンズ(Gans, 1960)とウォーターズ(Waters, 1990)の理論を通じて、在日の強い民族性が象徴的アイデンティティに移行していることを明らかにする。それは、日本国内での在日のアイデンティティが、外国人から準日本人として、そして最終的には(単なる象徴的な)

朝鮮系日本人に進化していくことを意味する(村井忠政, 2011 : 임영언, 2016 再引用)

- 注 4 장인성(2003)によると、世代変化とともに朝鮮総聯系在日のアイデンティティに、徐々に多様化(分化)が起こる傾向がある。彼らは初期に北朝鮮に対する同一性志向と日本・韓国に対する差別的志向で構成されたアイデンティティを有していたが、定住志向的共生観念の出現、民族と国家に対する認識の転換により、多様なアイデンティティ(祖国志向と定住志向、韓国志向と北朝鮮志向など)が混在した状態に変化するようになった。
- 注 5 他にも集団外結婚の増加、社会的地位の上昇、独自の文化維持の衰退などが段階移行に伴い進行するが、二つの変化 - (在日)主流社会への同化(ホスト集団からの)差別と排除の減少 - が象徴性への移行に重要な変数といえる。(임영언 2016)
- 注 6 国外で生まれ育った子孫が祖先のルーツがある母国を訪問する現象はよく Ethnic return と表現され、母国を訪問する人々は Ethnic return migrant, returnee などと定義される。韓国の先行研究では、帰国、帰還移住、帰還患者などと翻訳して表現されている。他にも遺産観光、民族的帰還、還流(逆移民)、再移動、根源移住、祖先と関連した帰還、逆-ディアスポラ移住、民族的帰還移住(者)など様々な表現が使われている。(윤다인, 2014) ただし、本研究ではこれらを「母国訪問(者)」と呼ぶことにする。その理由は以下の通りである。(1)ほとんどの研究参加者が韓国を訪問した動機は明らかに自分のルーツとの関連性、つまり Ethnic-return の要素が存在するのは事実である。しかし、(2)Return/帰還という表現を使用する場合、彼らが韓国に永続的に定住、居住するための意図で韓国行を選んだと解釈される余地があるため、本研究では中立的に「母国訪問(者)/Homeland visitor」という表現を使用した。
- 注 7 しかし、これらの分類が排他的に各研究成果を分けることができるわけでは決していない。ほとんどの研究が重複して2~3つ、あるいは4つの分類の要素をすべて含んでいる。一例に、윤다인(2014)は研究結果の主な特徴からタイプ論をとるが、研究内容全般には文化資本論的視点、韓国社会の排他的構造に対する批判などがすべて含まれている。当該分類はあくまで先行研究を体系的に分析し、母国訪問在日に対するより発展的な議論のために研究者によって恣意的に構成された分類であることを改めて明らかにする。
- 注 8 先行研究の理論的・方法的な限界に加えて、本研究との時期的・世代的な違いにも注目する必要がある。ほとんどが2000年代~2010年代初頭に行われた先行研究とは相違し、当時の日韓関係の文脈と現在の文脈はかなり異なると言える。特に韓流ブームにより、若い世代の在日内部では、韓国の国籍やルーツを持つことがもはや日本社会で隠さなければならないこと、恥ずかし

이ことではなく、むしろ誇らしいこと、自慢できることだと考えられるようになった。また、世代的な違いも存在するが、多くの世代研究が 2~3 世代の在日を対象としているのに対し、本研究では 4 世代の在日を主な研究対象としている。1~2 世代の在日先祖とは異なり、この 4 世代の在日は親世代が韓国生まれでない場合が一般的であるため、血縁的、家族的、言語的に韓国/韓半島から離れる傾向が深まり、1・2 世代あるいは 3 世代まで民族教育が常識として通用していたのとは異なり、もはや当該世代にとって民族教育は必須のものではなくなった。また、研究過程で在日社会内部での変化も検出されたが、最近になって民団と朝鮮総聯、韓国と北朝鮮の二分法あるいは帰化の問題が曖昧になり始めた。民族教育を受けることが当たり前だった親世代(1~3 世代)の場合、本人は民族教育を受けたとしても、子供には日本の学校教育などの多様な選択肢を提供することが多くなり、また、「日本への帰化=祖国への裏切り」、あるいは「韓国籍の取得=北朝鮮・朝鮮総聯への裏切り」という在日社会の常識もかなり希釈され、帰化および韓国的取得は一種の利便性のための選択となった。最後に、朝鮮学校内部での変化も相当なものであり、(1)以前の世代とは異なり、単純に北朝鮮を追従するのではなく、本来の趣旨である統一朝鮮を強調する傾向 (2)教師の世代が若くなるにつれ、南朝鮮社会に対する学校内部の敵意が減少したことなどがある。したがって、本研究は母国訪問者としての青年世代の在日に焦点を当てているが、その研究過程には、変化する日韓関係・在日のアイデンティティ・在日社会・朝鮮学校という構造的背景が内包されているといえる。

<参考文献>

- 김예림. (2009). 이동하는 국적, 월경하는 주체, 경계적 문화자본—한국내 재일조선인 3 세의 정체성 정치와 문화실천. 상허학보, 25, 349-386.
- 김이향. (2017). 돌아온 조국과 그리운 고향 사이에서: 재한(在韓) 자이니치(在日) 2 세 여성의 집 [서울대학교 대학원]
- 김진환. (2014). 이분법에 갇힌 조선사람. 통일인문학, 58, 67-97.
- (2015). ‘본질찾기’에서 ‘맥락이해’로. 통일인문학, 61, 181-206.
- 김현선. (2008). 國籍과 在日코리안의 정체성. 한국사회학회 사회학대회 논문집, 761-775.
- (2009). 국적과 재일 코리안의 정체성. 경제와사회, 83, 313-341.
- 유진아. (2021). 한국 이주 재일조선인 3 세의 생애사 연구-남북일(南北日)의 체류 및 거주 경험의 주체적 수용과 자기 인식을 중심으로 -. 질적탐구,

- 7(2), 385-409.
- 윤다인. (2014). 모국수학이 재일동포의 민족정체성에 미치는 영향에 관한 연구 [서울대학교 대학원]
- 윤인진, 손지혜, 이종원. (2020). 귀환 재외동포와 동포 지원정책에 대한 국민 인식. *디아스포라연구*, 14(1), 7-46.
- 윤일성. (2003). 재일한인의 사회적 적응과 정체성에 관한 연구. *한국문학논총*, 34, 9-307.
- 은용수. (2022). *국제정치와 정체성* (1st ed.). 사회평론아카데미.
- 이정훈. (1997). 재일동포의 민족 정체성에 관한 연구: 재일동포 모국 수학생의 경우를 중심으로 [고려대학교 대학원]
- 이향진. (2011). 한류와 자이니치. *日本學(일본학)*, 32, 161-194.
- 임영언. (2016). 재일코리아 민족정체성의 민족에서 상징으로 이행 고찰. *동북아시아문화학회 제 33 차 동아시아일본학회·동북아시아문화학회 2016 년 추계연합국제학술대회*, 414-419.
- 장인성. (2003). 총련계 재일한인의 민족정체성. *국제지역연구*, 12(4), 27-49.
- 조경희. (2011). ‘탈냉전’ 기 재일조선인의 한국이동과 경계 정치. *사회와역사(구 한국사회사학회논문집)*, 91, 61-98.
- 지충남. (2018). 재일한인의 민족정체성에 관한 연구. *로컬리티 인문학*, 19, 7-38.
- 최영호. (2008). 재일교포사회의 형성과 민족 정체성 변화의 역사. *한국사연구*, 140, 67-97.
- 川端 浩平, 二重の不可視化と日常的実践, *社会学評論*, 2012-2013, 63 卷, 2 号, p. 203-219,
- 金 知榮, 在日韓国・朝鮮人の「韓流」経験がナショナル・アイデンティティに及ぼした影響, *日本都市社会学会年報*, 2010, 2010 卷, 28 号, p. 135-150,
- Son, I., & Shin, H. (2020). Decentered identity negotiation and dilemmas among Korean-Chinese immigrants in South Korea. *Asian and Pacific Migration Journal*, 29(4), 469-491.

日本韓国研究 2023年度第3回研究大会発表予稿集

発行日 2023年8月24日

発行 日本韓国研究会

〒599-8531

大阪府堺市中区学園町1番1号

大阪公立大学 国際基幹教育機構

電話 072-254-9655

メール(事務局) [jak.jimu\(at\)gmail.com](mailto:jak.jimu@gmail.com) *(at)は@に変更してお送りください。

ホームページ <http://jak.main.jp/> (入会手続きは[こちら](#))

編集 日本韓国研究会編集委員

日本韓国研究会 
Japan Association of Koreanology